

創立60周年記念誌

（阿南高専便り「特別号」）



National Institute of Technology, Anan College

独立行政法人国立高等専門学校機構

阿南工業高等専門学校

校 訓

「真理・創造・礼節」

学生は、将来、有為な技術者として崇高な矜持と旺盛な責任感をもち、
国家社会のために貢献しうる人物となるため

- 一 真理を愛し、科学的叡知の円満な発達を心掛ける。
- 二 学業に専念するとともに規律を重んじ、礼儀を厳正にする。
- 三 勤労に親しみ、強固な意志と頑健な身体を鍛錬する。

有為（ゆ う い）：才能があり、将来役に立つこと。
矜持（きょうじ）：ほこり、自負、プライド。

校 歌

作詩 宮本村雄
作曲 保田芳郎

- 一 文化日本の息吹の中に
阿南を名に負う工業高専
夢秘めて威容を示す
科学の光りここに輝き
高度技術に誇りあり
- 二 緑の風は大地にそよぎ
ま す あお しおそばた
真澄める青潮峙つ津ノ峰
すみ え
松林墨絵を描く
我らの母校ここに地をしめ
せい き
天地の正気うけて立つ
- 三 橘湾の底ひも知らぬ
真理を求めて勤しみゆくもの
意気あがり誓いも新た
せいそう
星霜五年ここに打ち込み
高く時代にはばたかん

挨拶・祝辞 001

創立 60 周年にあたって 校長 箕島 弘二
 創立 60 周年祝辞 後援会 会長 蟻馬 由美
 母校創立 60 周年を迎えて
 悠久同窓会 会長 横手 久典
 創立 60 周年を迎えて
 阿南高専科学技術振興会 会長 西野賢太郎

寄稿 この 10 年に寄せて 006

一般教養、この 10 年のあゆみ
 一般教養主任 藤居 岳人
 機械コース、この 10 年のあゆみ
 機械コース主任 西本 浩司
 電気コース、この 10 年のあゆみ
 電気コース主任 小松 実
 情報コース、この 10 年のあゆみ
 情報コース主任 福見 淳二
 建設コース、この 10 年のあゆみ
 建設コース主任 森山 卓郎
 化学コース、この 10 年のあゆみ
 化学コース主任 小西 智也
 専攻科、この 10 年のあゆみ
 専攻科長 岡本 浩行
 教育活動のあゆみ 教務主事 松本 高志
 学生の活躍 学生主事 錦織 浩文
 明正寮のあゆみ 寮務主事 田上 隆徳
 国際交流室・グローバル推進室 10 年のあゆみ
 グローバル推進室長 安田 武司
 地域連携・テクノセンター 10 年のあゆみ
 地域連携・テクノセンター長 長谷川竜生
 技術部 10 年のあゆみ
 技術部長 吉村 洋

学生相談室 10 年のあゆみ

学生相談室長 山田 洋平

キャリア支援室 10 年のあゆみ

キャリア支援室長 吉田 晋

広報情報室 10 年のあゆみ

広報情報室長 藤井 浩美

図書館 10 年のあゆみ 図書館長 松尾 俊寛

写真・記録集 033

特別寄稿 038

・卒業生より

阿南高専から世界へ 山本 敬三

思い出と感謝の気持ちであふれた高専生活

後藤 祐美

私が阿南高専で得た財産

山下 惇

・退職された先生方より

阿南高専での思い出

名誉教授会会長 森住 昇

阿南高専の英語教育の歩み

名誉教授 勝藤 和子

高専は好きを進化させる最高の場所

名誉教授 多田 博夫

阿南高専での思い出

名誉教授 當宮 辰美

阿南高専と長くて深いお付き合い

名誉教授 湯城 豊勝

私の人生訓

名誉教授 西岡 守

60 周年記念事業 047

編集後記





創立 60 周年にあたって

校 長

箕 島 弘 二

2023 年度、阿南工業高等専門学校は創立 60 周年を迎えました。これも偏に長き間にわたって本校を支えていただいた関係の皆様の御陰であり、篤く御礼申し上げます。

本校は徳島県・阿南市をはじめとする地方公共団体や地域経済界からの強い要望のもと、阿南市見能林の地に実践的技術者を養成する高等教育機関として 1963 年に設立されました。その後、1996 年に専攻科を設置、爾来本科 8,002 名の卒業生、専攻科 492 名の修了生を送り出し、起業家を含め、産業界、地方公共団体、高等教育研究機関をはじめとする幅広い分野で活躍しています。

開学時は機械工学科と電気工学科（後に電気電子工学科）の 2 学科でしたが、4 年後に土木工学科（後に建設システム工学科）を設置し、当時の高度経済成長を担う技術者を養成する 3 学科体制を整えました。その後、1980 年代の計測・制御技術の飛躍的発展による産業の高度化に対応すべく、1989 年に機械工学科を再編して制御情報工学科を新設して、4 学科体制を確立しました。

開学当初から、実践的技術者の養成を目的に、実験・実習を重視した教育システムを採用しており、卒業生の能力は産業界から高く評価されていましたが、1990 年代初めには、大学進学率は 25～30% と、開学当初の約 10% から大きく増大し、より高度な教育を受けた人材への要望が寄せられるようになりました。これを期に、2 年課程の専攻科（構造設計工学専攻、電気・制御システム工学専攻）を設置（1996 年）し、本科卒業後に専攻科に進学・修了することにより、大学卒業者と同様に「学士」を取得できるようにしました。

2010 年頃になると大学進学率は約 50% に達して高等教育が大衆化する状況下で、中学校卒業時に専門領域を選択・志望することに困難を感じる生徒が見受けられ始めました。また、開学当初に目標とした、専門領域に特化した実践的技術者養成から、専門領域を核としたうえで情報・デザインなどの幅広い工学の基礎力、コミュニケーション力をはじめとする広義の教養に裏打ちされる幅広い分野への俯瞰力を有する技術者、さらにこれを深化させた複数の専門分野に精通した、独創性・創造性を有する技術者が必要とされるようになりました。また、徳島県では化学分野の経済規模・従業員数の割合が日本の平均と比べて大きいにも拘わらず、化学・素材を専門とする学科を設けておらず、地域経済界から化学・素材系人材の養成を強く要望されていました。そこで、2014 年に 4 学科を創造技術工学科の 1 学科 5 コース制に改組しました。1 学科制により、前述の人材養成に対応するとともに、専門領域を選択して志願する推薦入試とコースを選択せずに志願する学力試験を併用し、2 年次に専門コースへ配属することにより、中学校の要望に応えました。併せて、地域経済界の要望に応える化学コースに加え、情報通信技術の高度化に対応するため、制御情報工学科のカリキュラムを刷新して情



報コースを設置し、現在の5コース制（機械、電気、情報、建設、化学）に至っています。

開学当初より、実験・実習を多く取り入れた教育を行うことにより、実践的技術者・研究者を養成する点に大学教育とは異なる高専たる特長を有しています。近年では、これを深化させ、企業・社会の課題解決を図るPBL教育やロボットコンテストなどの種々のコンテスト参加を通じた教育、高専での学習と企業での長期就業を繰り返すコーオプ教育（就業経験学習）、高学年学生が低学年学生に自主的に教えるピアサポート活動、学生による小中学校への出前講義、阿南高専科学技術振興会（AST：旧ACTフェローシップ（阿南高専教育研究助成会））による起業塾・出前講義やAST倶楽部による社会・企業課題解決、さらに留学生の受入れや学生の海外派遣によって国際性を醸成することにより、創造性・起業家精神に富み、徳島のみならず世界で活躍する卒業生を輩出しています。

一方で、情報・通信・AI技術があらゆる分野に急激な変革を生じさせていることに対応できるように、先ず文部科学省の「数理・データサイエンス・AI教育プログラム（リテラシーレベル）」を高専で初となる2021年に認定を受け、翌年には「同（応用基礎レベル）」に認定されるカリキュラムを全入学生に対して導入しました。さらに、2023年度には、この分野の教育を強化する文部科学省の大学・高専機能強化支援事業（高度情報専門人材の確保に向けた機能強化に係る支援）の採択が決定し、2025年度以降の入学生を対象に全ての専門コースに高度情報教育プログラムを設けます。情報に関する素養は重要ですが、一人の技術者・研究者としての本領を発揮するためには、AI技術でも解決できない多くの課題に果敢に挑戦できる能力を身につけておくことが不可欠です。このために、工学はもとよりその基盤となる数学・物理・化学の本質を深く理解したうえで初めて可能となる「仮説を論理的に構築できる能力」を学生が身につける教育を継続する所存です。

徳島、日本そして世界で活躍する阿南高専卒業・修了生を輩出する使命を果たすべく、今後の社会変革や量子計算などの量子技術をはじめとする技術革新に対応できるように今後とも教育改革を継続します。併せて、教育力をあげるための教員自身の基礎研究力の強化、徳島・阿南の地に根ざした高専として、地方公共団体、地域企業等との連携、社会人のためのリカレント教育や小中学校の出前授業をはじめとした地域貢献を深化させるべく、教職員一同、一層努力します。今後ともご支援・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



創立 60 周年祝辞

後援会 会長

蟻 馬 由 美

阿南工業高等専門学校が創立 60 周年を迎えられましたことを、後援会を代表いたしまして心よりお慶び申し上げます。

これもひとえに、歴代校長をはじめ、教職員、後援会、同窓会、阿南高専科学技術振興会そして地域の皆様のご支援の賜であります。深く敬意を表するとともに感謝を申し上げる次第でございます。

現在縁あって後援会会長をさせて頂いておりますが、私も 28 期生として本校で 5 年間大変有意義な時間を過ごしました。卒業生として、また保護者として、この 60 周年記念行事に携わることができ感慨深い思いです。また後援会をきっかけに先輩方と交流する機会があり、今も精力的にご活動されている様子と母校への愛に感銘を受けると共に、60 周年の歴史の重みをひしひしと感じております。

後援会は本校教育事業を助成するほか、会員相互の親睦を図るための活動を行っております。教育や課外活動、就職斡旋事業への助成、福利厚生への支援を行うことで、創造力、実践力ある技術者を養成することを目的としております。

昨今の新型コロナウイルス流行により様々な制約があるなか、オンライン授業や健康観察等の新しい試み、学校や学生寮での感染対策システムの構築と、学生、教職員、保護者が一体となり創意工夫で乗り越えてきたことで、人間力の向上にも繋がったのではないのでしょうか。これからも次世代を担う人材が阿南高専より輩出され、伝統が受け継がれていくことを期待しております。

結びに、阿南工業高等専門学校の 60 周年を新たな飛躍の出发点とし、益々の発展を心から願い、お祝いの言葉とさせていただきます。



▲ 後援会校内清掃（2023 年 6 月 18 日）



母校創立 60 周年を迎えて

悠久同窓会 会長

横 手 久 典

阿南工業高等専門学校 60 周年誠にありがとうございます。悠久同窓会を代表いたしまして、心よりお祝い申し上げます。1963 年、4 月に機械工学科 2 学級、電気工学科 1 学級が設置され、見能林公民館及び見能林中学校の一部を借用して発足。その 4 年後 1967 年に土木工学科 1 学級を増設、と同時に全寮制（1・2 年）が採用される。1989 年、機械工学科 2 学級を機械工学科 1 学級と制御情報工学科 1 学級に改組。1993 年、土木工学科を建設システム工学科に改組、1996 年、専攻科（構造設計工学専攻、電気・制御システム工学専攻）設置。2002 年、電気工学科を電気電子工学科に改称、2004 年、独立行政法人国立高等専門学校機構が設置する阿南工業高等専門学校となる。2014 年、創造技術工学科として改組、機械コース、電気電子コース、制御情報コース、建設システムコース、そして化学コースが設置される。2019 年、構造設計工学専攻、電気制御システム工学専攻を創造技術システム工学専攻に改組し、4 コース制度が導入される。60 年の間にこれだけの変革をわが母校は遂げてきたのであります。学科の変遷とともに施設も大きく変わっております。見能林中学校の設備や公民館設備を利用されていた 1、2 期生から見れば、今やうらやむような環境で学ばれる学生諸氏に大きな期待と成長を期するもの大でありましょう。それにこたえるかのように卒業生の実社会での活躍ぶりは、同じ同窓生としても胸の張れるものと自負いたしております。我が悠久同窓会はやがて 8,000 人の大所帯となりつつあります。悠久同窓会の主たる目的は、会員同士の親睦を図ることはもちろん、母校の発展に寄与することです。阿南高専での学生生活がよりよいものとなり、よき環境の中で学び、大きく巣立ってくれることを切に願っております。少しでも多くの同窓生と団結をし、後輩の成長と母校の発展に貢献できるよう頑張る所存であります。

昨春、徳島にもう一つの高専が誕生いたしました、その名も「神山まるごと高専」。わが母校とは教育目的を異にする高専ではありますが、先輩高専として恥じぬ母校であってほしいと願います。「神山まるごと高専」には、財力では圧倒的に負けていますが、60 年の歴史と伝統、そして同窓会組織の存在は決してお金で買えるものではありません。わが校の財産であります。

少子化による高専入学志願者は年々減少傾向にあり、母校にとりましても厳しい時期を迎えねばなりません。一人でも多くの方々に自然豊かな地での学びや多くの優秀な技術者を輩出している実績を知っていただくための活動も支援してまいる所存であります。70、80、100 年と阿南高専が阿南の地で発展し続けることを切に願い、60 周年のご挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございます。



創立 60 周年を迎えて

阿南高専科学技術振興会 会長

西 野 賢 太 郎

大学、高専における研究活動を支援する科学研究費助成事業（科研費）の前身である「科学奨励金」制度が創設されたのは、1918 年であり、100 年を超す歴史を有しています。その間、科研費制度については幾多の改革がなされ、今日に至っています。阿南高専は多くの研究者による新たな産業技術研究を通じて社会で活躍する創造的人材を育成し、社会の持続的発展に大きく貢献してきました。

阿南高専科学技術振興会（略称 AST Anan kosen Science and Technology association）は、1995 年村山富市内閣において発出されました国の財政危機宣言により、国立大学、国立高専を対象とした科研費削減方針が示されたことを受けて、関係団体間で調整後、阿南高専の研究費支援を企業、個人に呼びかけて、阿南高専における研究活動活性化を目的として創設されました。当時の阿南商工会議所会頭田村藤太郎氏が呼びかけ人となり、阿南高専の研究活動を支援する団体として、阿南高専教育研究助成会（ACT フェローシップ）が創設され、初代会長には田村会頭が就任され、現在活動 29 年目を迎えています。活動当初、80 社でスタートしました同会会員はその後、順調に会員拡大を図り、現在 150 会員（企業会員 129 社・個人会員 21 人 2024 年 2 月 16 日現在）まで増加しています。活動当初は研究費支援が主たる事業でしたが、順次活動内容の見直しにより、会員企業と高専研究者連携による技術課題研究をはじめ社会課題解決、地域課題をテーマとした共同研究を事業化するとともに研究活動への学生参加の道を開きました。会員を対象とした講演会開催にはノーベル賞受賞者や気候変動研究者を講師として迎え、時代のトピックに沿った情報を提供しています。本学学生向けの活動として、AST 起業塾を通してアントレプレナーシップの醸成を、AST 倶楽部では、会員企業提案の課題を研究者と学生参加による三位一体で取り組み、数々の成果を挙げています。同会創立 25 周年には新たな活動に向けて、本校と同期（1963 年）開校の鹿児島高専、鶴岡高専を訪問し、他大学連携共同研究やインキュベーション活動の充実、地域連携活動など先駆的な活動情報を得ることができました。

2025 年、創立 30 周年を迎える阿南高専科学技術振興会は、『阿南高専のものづくり教育を核として、今日と「明日と」をつなぐ AST』をテーマとし、高専研究者・学生・企業の連携研究活動の充実を図ると共に、次世代ビジネステーマとして、人口減少時代のグランドビジョン研究や脱炭素、事前防災、気候変動に立ち向かう産業技術開発、超短パルスレーザーによる微細加工など未来を拓く研究活動により、創造性豊かな技術者教育と地域課題研究の深化に向けて引き続き阿南高専教育研究支援に取り組んでいきたいと思っています。

寄稿 この10年に寄せて

一般教養
機械コース
電気コース
情報コース
建設コース
化学コース
専攻科
教育活動
学生の活躍
明正寮
国際交流室・グローバル推進室
地域連携・テクノセンター
技術部
学生相談室
キャリア支援室
広報情報室
図書館



一般教養、 この10年のあゆみ

一般教養主任 藤 居 岳 人

一般教養に関して、阿南高専50周年以後の10年間について概観します。

まずは改組関連。2014年4月にそれまでの4学科が創造技術工学科1学科に改組され、同時に5コース制になって新たに化学コースが加わりました。1年生はそれまでどおり混合クラスで4クラス編成のままだったのですが、2年生からは5クラスになりました。一般教養の教員はたいがい1、2年生の学級担任を担当しており、前年度までは全部で8クラスの学級担任担当だったのですが、2014年度からは9クラスの学級担任をする必要が出てきたため、校務分掌がやや窮屈になった感は否めません。それに加えて、2年生の講義は定員の少ない建設コースと化学コース合同での実施となったため、50名前後の学生が一つの教室で受講する状態になりました。それでも2年生の講義担当の教員は常勤・非常勤ともに各教員で工夫を凝らした講義を展開し、これまで大きな問題もなく講義を担当しています。

次に教員関連。阿南高専は基本的にあまり教員の異動がなく、この10年もおおむねその状況が続いています。ご定年で英語の林田栄治先生、勝藤和子先生、数学の川崎敏和先生、櫛田雅弘先生がご退職（2023年現在、勝藤先生と櫛田先生は再雇用でご勤務）、理科の一森勇人先生、平山基先生がそれぞれ化学コースと情報コースに配置換、城本春佳先生が四国大学へご転任になりました。代わりに英語のクリストファー・プロワント先生、福井龍太先生、数学の浮田卓也先生、遠藤健太先生、理科の園田昭彦先生がご着任されています（2023年9月現在）。特に英語のプロワント先生は、本校初の英語ネイティブ教員としての

ご着任で一般教養としても画期的な出来事でした。阿南高専は長く国際交流室長をお務めになった林田先生のご尽力で国際交流が盛んになっていますが、プロワント先生は、英語の講義のみならずグローバル推進室のメンバーとして本校学生の国際交流を一層推し進めるための切り札としての活躍が期待されています。

次に講義関連。専門コースと相違して一般教養の授業は教室での座学形式の講義が多いです。ただ、昨今の教育スタイルの変遷を取り入れて、さまざまな形式の授業形態に取り組んでいる教員がいます。たとえば、2年日本語総合を担当されている坪井先生の授業です。座学形式ではなく、いち早くアクティブラーニング形式の授業を推進されており、シラバスによれば、ブレインストーミングとKJ法を採用した講義です。ブレインストーミングは、新たなアイデアを生み出すための方法の一つ。KJ法は、ブレインストーミングによって得られた発想を整理し、問題解決に結びつける方法。学生からの評価も高く、今後も継続的に授業方法をブラッシュアップされるとのこと。

また、4年物理学基礎ご担当の園田先生もユニークな講義をされています。物理学は現象を数式で表すことが一つの目標になるとのことで、その際に必要な物理のための数学を重視した講義を展開されています。さらに、大学編入学をめざす学生向けに大学編入学試験問題の過去問をよく取り上げられています。4年生には少し難易度が高いようですが、図書館で調べたり友人と議論したりして悪戦苦闘しながらも学生が主体的に解答をレポートにまとめることで、大学や企業で研究・開発するうえでも重要な、実践的な課題に取り組む能力を学生自身が磨くことができています。

以上、ここ10年の一般教養に関するトピックを取り上げました。続く10年も技術者として実践的能力を備えた学生を輩出するべく、一般教養の教員も阿南高専の教育に貢献してゆくことを期待しています。



▲ クリス先生講義風景



▲ 一般教養教員集合写真

機械コース、 この10年のあゆみ

機械コース主任 西本 浩 司

機械コースにおける10年間のあゆみについて紹介したいと思います。

まず機械コースの教員についてですが、2014年度から1学科制となり、機械工学科から創造技術工学科機械コースとなりました。改組に伴い、西岡守先生、吉田岳人先生および奥本良博先生が化学コースへ配置換えとなりました。2020年度には、多田博夫先生が退職され徳島工業短期大学（現学長）に転出されました。また、化学コースへ配置換えになっていた奥本良博先生が機械コースへ再配置換えとなりました。さらに、安田武司先生が国立研究開発法人 物質・材料研究機構にNIMS特別研究員として内地留学され1年間研究に従事されました。2022年には、春の叙勲において、中村克孝名誉教授が瑞宝小綬賞を受章されました。2023年3月には、西野精一先生がご退職されましたが、現在も嘱託教授として教育研究にご尽力いただいています。

次に教育面についてですが、カリキュラムの大きな変更として、2020年度に座学と実習、設計・製図および実験において、より有機的な繋がりを持たせるために、機械工作実習1・2と機械工学実験1・2を機械工学実験実習1～4に統一し、基本的な技術の体得から高度な理論の理解が深められるように変更を行いました。近年の情報化社会への対応としては、2019年度に情報処理1を4年から3年へと開講時期を早めるとともに、機械工学実験実習1～4において、ロボットアームやシーケンサを取り入れたメカトロニクス実習を導入しています。特に、機械工学実験実習3では、これまで学んできたものづくりの知識と技術、設計・製図および各種力学を駆使し、4～5名のグループで与えられた課題を解決可能なロボット製作実習を2022年度から実施しています。ロボット製作においては、従来の機械加工に加えて3Dプリンタを幅広く利用しています。その他、2020年度に3次元CADの必修化および自動制御2の新設、2022年度には機械数学とロボット工学を新設するとともに、機械力学を機械力学基礎1と2および機械力学に分割し、実践



▲ 塑性加工実験風景



▲ 実習風景

的な技術者育成において教育効果を高めるためのカリキュラム変更を実施しています。

実践的な技術者育成においては、2014年度から厚生労働省の若年技術者人材育成支援事業である「ものづくりマイスター制度」を活用し、機械工作実習教育の質の向上と学生の技術力向上に努めています。長年産業界で活躍された高度な技術力を持つマイスターの先生から主にフライス加工、旋盤加工、溶接の指導をしていただいています。身についた専門的知識や技術・技能については、CSWA認定試験および各種技能検定などの資格試験取得という形で具体化できています。

最新鋭の教育・研究設備は、幅広い産業分野で活躍できる実践的且つ創造的な技術者を育成するために必要不可欠です。過去10年間にきてさまざまな教育・研究設備を機械コースに導入しました。特に3Dプリンタは、各研究室で保有するものも含めると10台以上あり、ロボット製作実習や卒業研究に多用されています。また令和2年度には、実習工場（現創造技術ファクトリー）が改修され安心・安全で使いやすい実習工場および高等教育機関の目指すべき、「ものづくり拠点としての実習工場」の再構築がなされました。実習設備の再配置による合理化においては、工場内で企画立案から設計、製作、組立および評価までを円滑に実現できる機能的な改修が実現できました。これらの教育・研究設備および実習工場を活用し、日々の教育・研究に取り組みながら各種コンテストや学会での発表などを行い、成果を上げています。

2014年度から2023年度までの10年間にける機械コース学生の進路状況ですが、2010年



▲ 研修旅行 JAXA

度までリーマンショックの影響により求人数は402社まで低下していましたが、徐々に回復し、令和に入って600社を超えるようになっていきます。2020年度からのコロナ禍の3年間における求人数の悪化はほとんどありませんでした。進学先として、近年では大阪大学、九州大学、千葉大学、東京農工大学、神戸大学、京都工芸繊維大学などにも進学しています。

最後に2010年度より2泊3日の工場見学研修旅行を実施しています。工場見学旅行を通じて、高度で先端技術を用いたものづくりを目の当たりにし、自らの専門分野における技術や知識が現場でどの様に活用されているかを知ること、今後の学習意欲の向上とキャリア形成の一助となっています。また、クラスの思い出づくりや親睦を深める良い機会にもなっています。

機械工学は、機械を作るため・動かすために必須となる基礎学問であり、特に「材料力学」「機械力学」「熱力学」「流体力学」の4つの力学は、時代が変わり産業構造の変革があろうとも不変です。したがって機械コースでは、4力学を基盤として時代の流れに合わせたカリキュラムの改善を継続して実施し、ものづくりを通して社会の発展に貢献できる技術者を育成するため教職員一同力を尽くしております。今後とも、機械コースの教育・研究活動へのご支援、ご協力をよろしくお願いいたします。



▲ 機械コース教員集合写真

電気コース、 この10年のあゆみ

電気コース主任 小松 実

2014年度より1学科5コース制となり、電気電子工学科も新たに創造技術工学科電気コースとなりました。コース選択の参考となる1年生のものづくり工学実習では、はんだ付け実習などを実施してきましたが、2018年以降、ロボット実習やスマートセンシング実習、光通信・レーザー加工実習など、電気コースへの興味と関心を持ってもらえるように工夫しています。電気コースに配属される2年生は毎年36名程度となり、電気電子工学分野の専門科目がはじまります。3年生は専門科目が増え、その内容も高度になります。4年生は企業でのインターンシップや大学編入学を見据えて大学のオープンラボ等に参加しています。5年生は就職活動および編入学試験に臨み、5年間の総まとめとなる卒業研究に取り組んでいます。

この10年の教員人事では、2014年度末に當宮辰美先生、2015年度末に砂原米彦先生がご定年になられました。當宮先生は1976年4月に本校に着任されて以来39年間にわたり、図書館長や専攻科長などの要職を歴任され、また電気機器工学、パワーエレクトロニクスなどの授業、さらには風力エネルギー利用や信号処理などの分野において多くの研究成果を挙げられました。定年退職後も2016年度末まで嘱託教授としてご尽力いただきました。砂原先生は三菱電機株式会社での勤務を経て2006年4月に本校に着任されて以来10年間、担任や主任など要職を歴任

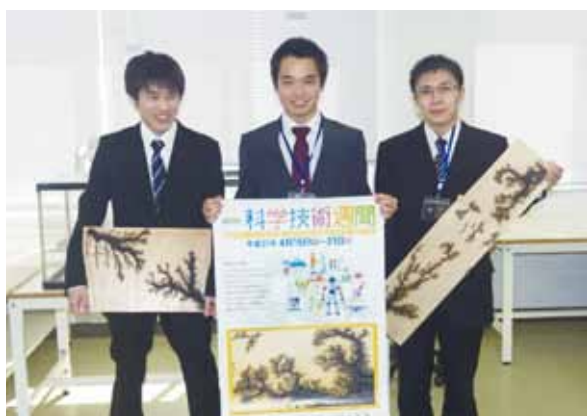


▲ 最先端レーザー実験

されました。また、企業で培った通信関係の専門知識を生かして電磁波工学、通信工学理論などの授業を熱心に教授されました。

2015年度、上原信知先生が高専機構教育研究調査室へ行かれ、高専教育の高度化に向けて尽力されることになりました。現在、小林美緒先生は本部事務局准教授・国際参事補として本部およびタイ高専へ異動されています。この間に、新たに長岡技科大から藤原健志先生、香川大学から香西貴典先生、徳島大学から生田智敬先生（現在、鈴鹿高専電気電子工学科講師）、金沢大学から朴英樹先生、岡山理科大学から内野翔太先生をお迎えしました。

2017年春、電気棟改修工事が終了しました。これまでとは全く異なる実験室、教員室、卒研室等が完成しました。実験実習の内容も新たにIoTに関連するテーマを取り入れ、これからの時代に即したものに改変しています。その中で、2018年から学年の枠を超えて構成した模擬会社による課題解決型実習の電気技術イノベーション実習を開始しました。2018年11月、蒼阿祭の企業ブースにおいて、高電圧による絶縁破壊実験教室を実施し、そのリヒテンベルク図形の写真を文部科学省科学技術週間「科学の美」インスタ写真コンテストに応募した結果、最優秀賞を獲得し、全国に配布される科学技術週間ポスターに採用されました。また、eスポーツ大会を企画運営する会社の取り組みがNHK Eテレの番組で紹介されました。さらに2021年3月、2020年度 人生100年時代の社会人基礎力育成グランプリ全国決勝大会において、準大賞及び審査員特別賞を受賞しました。審査員から、社会人基礎力育成が本来目指すべき姿と絶賛されました。また、2020年度から3年間、三菱みらい育成財団の助成を受け、2020年度三菱みらい育成財団成果発表会 AWARDにおいて準グランプリを受賞しました。



▲ 最優秀賞（2018年度科学週間ポスター採用）

現在、電気コースでは、国内最先端のフェムト秒レーザーを搭載した微細レーザー加工システムを開発し、レーザー技術者および光半導体関連企業で活躍できる人材（学生）を育成すること、また、微細レーザー加工技術を活用した伴走支援を目的に、地元企業とともに取り組んでいます。電気コースでは、専門科目に関する知識や技術とともに、社会人基礎力の育成に努めています。今後ともご支援、ご協力をお願いいたします。



▲ eスポーツ体験会（障害者支援施設訪問）（2019年）



▲ 中学生一日体験入学



▲ SEMICONJAPAN2022

情報コース、 この10年のあゆみ

情報コース主任 福見 淳二

2014年度より1学科5コース制が導入され、制御情報工学科が創造技術工学科情報コースとして新たにスタートしました。同時にコース選択制も導入され、2年生のコース選択に向けた1年ものづくり工学では、プログラミング実習やセンサ実習等のものづくりに関係するテーマで実習を行い、情報コースの特徴であるプログラミングに関する体験を実施しています。2022年度からは、各教員の研究テーマ紹介を兼ねた実習を導入し、AI、VRやドローンプログラミング等に関する最新技術の体験を行う機会を設けています。

その結果、情報コース配属の2年生は毎年38名程度であり40名を越える年もあるなど、情報技術に興味のある学生が非常に多くなっているとの実感があります。2年生以降はプログラミングに関する実習が非常に多いのが情報コースの特徴であり、JAVA、C、Python、Ruby、VHDL等の様々な言語を卒業までに学習し修得しています。そのため、毎年JAVAプログラミング能力検定やC言語プログラミング能力検定に2、3年生中心に多くの学生が挑戦し、5年生までには全員がいずれかの検定の2級もしくは3級を取得しています。特に、2級を取得する学生が年々増加しており、現在は3分の2の学生が取得するなど、プログラミング言語に対する学習意欲が旺盛な学生が多く集まっています。

また、学生の研究活動に関しても制御情報工学科からの伝統を受け継ぎ、情報コース5年生に学会発表を推奨しています。4年生の創造工学ゼミナールの授業で各研究室に分かれて研究活動を

開始し、5年生の秋頃に学外の学会発表に参加して研究成果を発表しています。特に、計測自動制御学会四国支部学術講演会、電気関係学会四国支部連合大会等に積極的に参加する学生が増えており、一時期は5割の学生が学会発表を経験していました。しかし、コロナ禍での学会中止や移動制限等の影響で一時3割程度に減少していましたが、少しずつ元の状態に戻りつつあり、今後は学生の5割が学会発表することを目標に教員一同研究指導に取り組んでいきます。

ここ10年の教員人事では、2015年度に小林美緒先生が電気コースに異動されました。2016年度には一ノ瀬元喜先生が静岡大学工学部へ転任されました。一ノ瀬先生は、本校で約7年間にわたり授業だけでなくサッカー部やプログラミング同好会の顧問としてご活躍されました。2018年度には、岩佐健司先生が都城工業高等専門学校の校長として赴任されました。岩佐先生は、制御情報工学科の運営にとどまらず、教務主事や学生主事など本校の運営に多大な貢献をされました。現在は、津山工業高等専門学校の校長としてご活躍されています。新たに、2013年度に豊橋技術科学大学から太田健吾先生をお迎えしました。太田先生の専門は音声情報処理であり、現在准教授として情報コースの核となるAI技術や情報システムに関する授業を担当していただいております。対話AI「Saya」の開発にも携わっております。また、2013年度には特命助教として本校制御情報工学科卒業生である児島雄志先生をお迎えし、プログラミング演習などの演習科目を中心に指導を行っていただきました。現在は、徳島大学大学院医歯薬学研究部の助教としてご活躍されています。

情報コースのイベントとして研修旅行にも力を入れており、2年生では関西方面日帰り、3年生では関西方面1泊2日、4年生では関東方面2泊3日の研修旅行を実施してきました。2、3年生では理化学研究所計算科学研究センターのスーパーコンピュータ、4年生では東京ゲームショー



▲ 蒼阿祭 情報コース3年（2021年）



▲ 研修旅行 情報コース3年（2023年）

建設コース、 この10年のあゆみ

建設コース主任 森山 卓郎

など最先端の情報技術を体験、見学するのが特徴です。しかし、ここ数年はコロナ禍の制約で中止となっていました。2023年から3年生の1泊2日関西研修旅行が再開されました。クラス全員が参加し、非常に有意義な研修だったとの感想が多く寄せられました。今後、2年、4年の研修旅行も順次再開していきます。

また、広報活動や中学生一日体験、全国高専プログラミングコンテスト、DCONなど様々な行事やコンテストに学生が積極的に参加しています。2018年度には本校が主管となり第29回全国プログラミングコンテストがアスティとくしまで開催されました。課題部門、自由部門、競技部門に参加した情報コース学生主体の4チームが全て受賞するという成果を挙げました。2022年度から実施しているイオンモール徳島での広報イベントにも、学生主体の体制でVR体験やプログラミング体験などのテーマで参加しています。

今後の情報コースは、AIエンジニアの育成を目標に制御情報工学科の伝統である学生主体の教育・研究を引き継ぎつつ、最新の情報分野によりシフトしたカリキュラムを構成していきます。



▲ 全国高専プログラミングコンテスト（2018年）



▲ イオンモール徳島イベント出展（2022年）



▲ 情報コース教員集合写真

創造技術工学科に改組され、建設システム工学科1年生を表す1Cという呼び名が消えて、新たな時代のスタートとなりました。2年生で建設コースに配属された学生は毎年20数名となり、建設システム工学科時代は30名以上の学生がいたことを考えるとコンパクトになりました。

授業カリキュラムに建築系科目を増やし、卒業時に2級建築士受験の資格が得られるようになってからは、住宅メーカーなどの建築系企業や大学の建築系学科に進む学生も見られるようになりました。土木系においても国土交通省四国地方整備局などに就職する学生もいるなど、これまで以上に多様な進路選択が可能になったように思います。大学編入学先も、九州大学や京都工芸繊維大学、奈良女子大学、千葉大学などに進んだ学生もいました。

コース内の行事も、この10年で様々な新しい取り組みを行っています。徳島県技術士会出前講座は2010年から行ってきましたが、今では毎年恒例になりました。夏季休業中には関西方面への学生の研修旅行も実施するようになりました。今年度は3年生が関西方面に行き、橋や建物などの見学も行いました。四国電力の伊方発電所などの見学会も夏季休業中に行っています。いずれも最近ではコロナで中断していましたが、2023年度から再開しています。建設コース配属の歓迎会として2年生と北の脇海岸でBBQも行っていました。こちらもコロナで中断していましたが、今年



▲ 橋梁の建設現場見学



▲ 2C 歓迎会 (BBQ)

は2Cの教室でドリンクとお菓子を配布し、ビンゴゲームや教職員、先輩からの歓迎のスピーチを行うなどして歓談しました。建設コースの2～5年生の学生だけで行う建設球技大会も毎年12月に行うようになりましたが、これも中断していましたので、今年度は再開を検討しています。

全国高専デザインコンペティション（デザコン）にも、これまでに何度も参加しています。デザコンは2024年には阿南高専を会場として開催される予定です。全国の高専の学生らが多数来校し、各部門で競技を行います。今、建設コースの教職員らを中心に準備を進めています。他にも建設フェア四国でのどぼじょ（土木女子）イベントや建築甲子園などの各種イベントやコンペティションに参加するなど、学生の学外での活動も積極的に行っています。

最近では、イオンモール徳島で開催している本校のイベントに、建設コースも参加しています。「ペーパーブリッジをつくろう」や「ブリッジコンテスト」、「VR体験会」などの内容で実施し、当日はスタッフとして参加した学生らも来場した小中学生の対応をしました。



▲ 協働プロジェクト



▲ 高専デザインコンペティション参加

この10年間は、教員の異動もたくさんありました。海洋生態学・生態系保全が専門の大田直友先生は、学科改組時に化学コースに配置換えになりました。住居学・地域計画が専門の池添純子先生が徳島文理大学に、水環境工学が専門の川上周司先生が長岡高専に転出されました。また、構造工学・地震工学が専門の笹田修司先生は定年で退職され、河川工学・環境工学が専門の湯城豊勝先生と構造工学・信頼性工学が専門の松保重之先生は、定年後2年間の嘱託教授としての勤務の後、退職されました。コンクリート工学・環境技術が専門の堀井克章先生は定年後2年間の嘱託教授としての勤務の後、2024年3月に退職されます。転出や退職をした教員の後任としては、建築計画・建築設計が専門の多田豊先生、構造工学・地震工学が専門の井上貴文先生、コンクリート構造・維持管理工学が専門の角野拓真先生、環境工学が専門の景政柊蘭先生が着任されています。土木工学科の時代からいらした先生方が退職され、教員の世代交代が進むことで卒業生の方々には寂しく感じられるかもしれませんが、次の時代の建設業界を担う人材育成をすべく、今後も学生教育などに尽力してまいります。これからもご支援のほど、よろしくお願いいたします。



▲ 建設コース教員集合写真

化学コース、 この10年のあゆみ

化学コース主任 小西 智也

▶ 化学コースの新設

多くの化学系企業を擁する地元産業界等からの要請も受け、2014年、創造技術工学科設置と同時に化学コースが新設されました。2019年には専攻科の改組に伴い、応用化学コースが設置されました。すなわち、この10年間で本コースの歴史そのものであり、その間以下の取り組みを行ってきました。

▶ 特色ある教育カリキュラムの構築

化学コースでは「自然を知る（物理化学・分析化学）」「環境を学ぶ（生物学・環境工学）」「物質を創る（有機化学・無機化学・化学工学）」の3つの学びを通して、化学薬品製造技術者、化学プラントエンジニア、品質管理技術者、化学研究者に必要とされる知識と技術を修得します。実践を重視した教育方針に特色があり、4年までに上記6分野にわたって実験科目を設置しています。4年前期には全研究室のテーマを含む「物質化学実験」があり、より実践に即した実験技術を修得します。4年後期からは各研究室に配属され、5年からの卒業研究に備えます。2023年に新設した「創造ゼミナール」では、大学研究者、企業技術者等を招聘して最先端の科学技術や工学問題について学びます。「環境工学」等、資格取得を見据えた科目も設置されており、多くの学生がeco検定、QC検定、甲種危険物取扱者等の資格を取得しました。また、エコマスタースタグランプリ2017、2018で、それぞれ学生部門第2位、第3位に表彰されました。

▶ 充実した研究環境の整備

2017年に創立50周年記念材料工学棟が竣工し、ICP-AES、TG-DTA、DSC、GC-MS、FT-IR、HPLCなどの分析装置が集約されました。同時に、創造テクノセンター棟にはNMR装置が新規導入されました。これらの最先端の装置を活用して実験科目の授業を実施するとともに、毎年5年生が卒業研究を精力的に行い、



▲ 物質化学実験

国内外の学会発表でも表彰されています。また、専攻科の応用化学コースでは2021年当時全教員の研究テーマが大学改革支援・学位授与機構の審査で認められ、特例適用専攻科としての特別研究を指導できる体制が整いました。現在、8名の常勤教員、2名の技術職員で教育・研究を実施しています。

▶ 数々の進学・就職実績

すでに第5期生が卒業しましたが、例年5～10名程度が進学を選択しています。これまでに阿南高専専攻科（14名）をはじめ、徳島大学（11名）、岡山大学（9名）、豊橋技術科学大学（9名）、神戸大学（4名）、大阪大学（2名）、京都工芸繊維大学（2名）、長岡技術科学大学（2名）、九州大学、香川大学、広島大学、神奈川大学、千葉大学に合格しました。工学部だけでなく、理学部、化学・生物系学科への進学実績が増えてきたことも特筆すべき傾向です。

就職では、設立当初から多くの企業より求人依頼をいただいております。これまで専攻科生、化学コース第6期生（内定）を含めると、県内企業では㈱大塚製薬工場（12名）、大塚製薬㈱（8名）、日亜化学工業㈱（4名）、東亜合成㈱（5名）、大鵬薬品工業㈱（3名）、県外企業では日東電工㈱（7名）、三菱ガス化学㈱（6名）、住友化学㈱（4名）、三洋化成工業㈱（4名）をはじめ、多くの企業に就職しました。また、近年では国立造幣局への就職実績もあります。

▶ 特色のある取り組み

学生がインターンシップ以外にも多くの企業、大学、研究所を訪問できるよう、研修旅行、日帰り見学も多数実施しています。また、4年生が新2年生を歓迎する「ようこそ、化学コースへ!」の会、白衣着用式、コース優秀学生の表彰などのイベントを行っています。

地域貢献の一環として、公開講座、出前授業、



▲ 新2年生白衣着用式（2023年）

科学イベント等のアウトリーチ活動も積極的に行っています。さらに、本コースの教育内容をベースとした地域若手企業技術者向けの研修も10年来実施しています。

この10年間、化学コース立ち上げ当初からご尽力いただいた3名の先生方がご定年を迎えられました。西岡守先生は2021年3月にご定年を迎えられ、その後2年間嘱託教授として産学連携にご尽力されました。一森勇人先生は2022年3月にご定年によりご退職されました。吉田岳人先生は2023年3月にご定年を迎えられ、現在は嘱託教授としてご活躍されています。

化学コースは、本校60周年の節目に第10期生を迎えます。未来の学生に向けてコースの魅力を存分に発信すべく、本格的なPR動画も作製し、YouTubeに公開しました。近年では女子学生の割合も増え、クラスの半数を占めるようになりました。留学生もこれまでに4名受け入れています。時代の変化に合わせ、今後数十年先にも活躍できる化学系技術者・研究者の養成を目指して、数理・AI・データサイエンスも取り入れた先進的な化学教育も展開していく予定です。



▲ イオンモール徳島ものづくり体験イベント



▲ 中学生一日体験入学（2023年）



▲ 化学コース教員集合写真

専攻科、 この10年のあゆみ

専攻科長 岡本 浩 行

専攻科は、1996年4月に設置され、2019年3月まで構造設計工学専攻と電気制御システム工学専攻の2専攻の体制で運営されていました。2019年4月からは本科の1学科制の改組に伴い、創造技術システム工学専攻の1専攻となり、機械システムコース、電気電子情報コース、建設システムコース、応用化学コースの4コースの体制で運営されています。専攻科で目指す技術者像は「専門分野に関する確固たる知識をベースとして持ち、その方法論・実践力を、幅広い工学分野を対象として創造的に活用できる技術者」であり、今後も引き続き目指す技術者像を満たす修了生を輩出できるよう専攻科に係る教職員一丸となって取り組んでいます。

特例適用専攻科の認定

特例適用専攻科は、大学教育に相当する水準の教育を行っていることを大学改革支援・学位授与機構に認定され、一定の実績を有する専攻科のことです。本専攻科では、2015年度に構造設計工学専攻と電気制御システム工学専攻の2専攻が認定を受けました。2019年4月に1専攻に改組された創造技術システム工学専攻が認定を受けています。特例適用専攻科に認定されることで、従来の学位授与の審査における試験（小論文試験または面接試験）に代わる授業科目「学修総まとめ科目」の単位修得等の要件を満たすことで学士の学位が授与されるようになりました。学生は特

別研究に集中して取り組めるようになり、2022年度日本材料科学会四国支部第30回講演大会や2023年度軽金属学会第144回春期大会に参加した学生が発表賞を受賞するなど、より一層高いモチベーションを持って活発に研究活動が進められています。

教育・研究環境の整備

2019年4月に専攻科棟内にアドバンスト・アクティブ・ラーニング室を整備しました。創造工学演習などの授業において、専攻の枠を超えた学生グループを形成し、チームとして仕事をするための能力の育成を実践しております。さらに2023年度には収容人数を増やした教室を整備し、専攻科全学生を収容できる教室を整備しました。また、同年度からは専攻科全学生合同の授業があり、学年に関係なく専攻科学生全員で議論などを行えるようになりました。

JABEEの認定継続

日本技術者教育認定機構（JABEE：Japan Accreditation Board for Engineering Education）により2004年度に本校独自の教育プログラムである「創造技術システム工学」が認定されています。JABEE認定教育プログラム修了生は世界に通用する教育を受けた技術者であり、専攻科から多くのJABEE認定教育プログラム修了生を社会に送り出しています。引き続き、JABEE認定教育プログラム修了生を送り出すために2020年度に認定継続審査を受審し、6年間の認定を受けて現在に至っています。



▲ 専攻科特研発表会



▲ 専攻科対面式

教育活動のあゆみ

教務主事 松本高志

2014年度、本校はそれまでの5学科制から1学科5コース制へと改組しました。当時、高専機構本部はこのような改組を推奨しており、先陣を切る形となりました。それまでは、学科改組や学科名変更により、機械工学科、電気電子工学科、制御情報工学科、建設システム工学科の4学科、各学科40名定員で運営していました。改組の数年前から将来構想が検討され、県内に化学系企業が多いものの高校、大学における化学系人材の養成数が不足しているとの調査結果から化学コースを新たに設置して、地域ニーズに答えることとなりました。その結果、改組後は、創造技術工学科内に機械コース、電気コース、情報コース、建設コース、化学コースの5つの専門コースと一般教養が設置されました。入学定員は160名のままで、各コース定員は均等割りではなく社会情勢や入学希望等に応じて変更します。

国立高専機構は、2011年度に教育の質保証を目的としモデルコアカリキュラム（試案）を策定しました。モデルコアカリキュラムとは、国立高専のすべての学生に到達させることを目標とする最低限の能力水準・修得内容である「コア」と、高専教育のより一層の高度化を図るための指針となる「モデル」とを提示しています。「コア」では、「数学」「自然科学」「人文社会学」「工学基礎」といった技術者が共通で備えるべき基礎的能力と、「実験・実習」を含む専門分野別能力の到達目標を明示しています。「モデル」では、「汎用的技能」や「態度・志向性（人間力）」「総合的な学習経験と創造的な思考力」といった技術者が備えるべき分野横断的能力の到達目標を明示しています。本校の改組後、この「モデル」に対応する科目として、4年次に共同教育が設けられました。1学科制の利点としてコース横断の授業で、異なる専門分野の学生がグループを構成し、様々な課題解決に取り組むPBL型の授業形態です。これはグループ活動におけるコミュニケーション、主体性、チームワーク、リーダーシップ、といったコンピテンシーの育成を目的としています。また、低学年においては、4年次の共同教育へつなげるためのコース



▲ 授業風景

横断型のPBL授業としてTL（Transformative Learning）を設け、コンピテンシーの基礎育成を全学的に実施しています。また、2014年度には文部科学省の競争的資金である大学教育再生加速プログラムのテーマII（学習成果の可視化）に応募し、高専での採択は本校のみでした。6年間実施したこのプログラムにおいて、本校にそれまではなかった全学で活用するLMS（manaba）をICT活用教育の基盤と位置づけ、

- ① コンピテンシーの可視化
- ② ラーニング・ポートフォリオによる学修時間の確保
- ③ 教員のアカデミック・ポートフォリオ作成（AP）
ティーチング・ポートフォリオ作成（TP）
- ④ 学生調査IRの実施

の4つの取組を中心とし、コンピテンシーを育成するためのアクティブ・ラーニングの取組も推進しました。これらは最近ではよく知られた内容ですが、当時は他高専に先駆けて独自に実施した取り組みです。

2022年冬から新型コロナウイルスが蔓延し始め、学校教育も大きな影響を受けましたが、徹底した新型コロナ感染症予防対策の下、「学びを止めない」教育体制と学校運営に努めました。4月6日に入学式は、1年生のみで間隔を十分に取って実施できましたが、翌日の始業式は中止となり、教科書販売ができませんでした。4月20日から遠隔授業の試行、時間指定により、学生が密集しないよう教科書販売を実施、5月7日から遠隔授業を正式に開始しました。この際、LMS（manaba）を2014年度から導入していたためオンデマンド授業のYouTube配信、授業教材の配布、課題提出等、大きな混乱なく遠隔授業を始められました。また、学生の通信環境を調査し、必要な学生にはPCやWi-Fiルーターを貸し出し、学びを支援しました。遠隔授業では対応が難し



▲ 入学式 (2020年)



▲ 卒業式 (2021年)

い実験実習を実施するためにクラス別分散登校、8月末には遠隔学習をサポートする対面授業を2週間実施し、期末試験を実施することができました。後期は対面授業を実施しましたが、2021年度入学検査の推薦選抜は面接を取り止め、卒業式はコースごとに別教室での証書授与、また各種体育大会、蒼阿祭中止など課外活動も活動を制限されましたが、安心安全を前提とし「学びを止めない」よう取り組みました。

本校は、2023年度大学・高専機能強化支援事業、高度情報専門人材の確保に向けた機能強化に係る支援（支援2）に採択されました。今回の申請では高専の採択は5校のみにとどまりました。この採択により、今後の10年は、情報化の社会情勢に合わせ、学校全体として情報教育を強化する計画となっています。

SHR 風景 ▶



◀ 授業風景 (体育)

学生の活躍

学生主事 錦 織 浩 文

阿南高専創立60周年を記念し、ここ10年間における学生の活躍の中で特に注目される事項を取り上げ報告いたします。

1. 第29回全国高専プログラミングコンテスト開催（本校主管）

2018年10月27日～28日、アスティとくしまにて、本校が主管となり、第29回全国高専プロコンを開催しました。本校の教職員・学生多数の献身的なサポートにより成功裡に終了し、参加した全国の高専・企業から高い評価を受けました。本大会では課題部門・自由部門・競技部門を通して本校出場4チームがすべて受賞という快挙を果たしました。



2. 高専ロボコン 2020・2023 全国大会出場

高専ロボコン2020のテーマは「はぴ☆ロボ自慢」。コロナ禍のためロボコン史上初のオンライン開催となりました。本校出場チーム Awa Dancers は3Dプリンタを活用して製作したロボットによる阿波踊りの再現をし、学生による踊り子隊・鳴り物隊を加えてパフォーマンスを行いました。競技委員会の推薦により、本チームは2020年11月29日、全国大会に出場しました。



大会終了後、本ロボットは阿南市役所ほか各所で実演を行い、展示もされました。

高専ロボコン2023では、四国地区大会（高知高専主管）において阿南高専Aチーム「果糖丸」が技術賞を受賞し、全国大会出場を果たしました。全国大会は2023年11月26日、両国国技館で

行われ、保護者・卒業生ほか多数の応援をいただきました。結果は初戦敗退でしたが、特別賞（東京エレクトロン株式会社）を受賞しました。



3. 全国大会出場・活躍

ここ10年間に学生の全国レベルでの活躍は数多くありました。主なものを掲げます。

○ 2014 年度	弓 道	全国高専弓道大会	男子個人優勝
	水 泳	インターハイ	男子 100m バタフライ出場
		全国高専体育大会	男子 200m 自由形第 1 位 男子 100m バタフライ第 1 位
	テニス	全国高専体育大会	女子ダブルス優勝
○ 2015 年度	陸 上	インターハイ	男子やり投出場
	弓 道	全国高専弓道大会	男子個人優勝
		インターハイ	男子団体出場
	水 泳	インターハイ	男子 100m バタフライ・男子 200 m バタフライ出場
		全国高専体育大会	男子 200m 自由形第 1 位、男子 800m 自由形第 1 位、 男子 100m バタフライ第 1 位
	テニス	全国高専体育大会	女子ダブルス優勝（2 連覇）
	陸 上	インターハイ	男子 1500m・男子 400m ハードル出場



○ 2016 年度	弓 道	インターハイ	男子個人出場
	水 泳	全国高専体育大会 全国国公立大学選手権	男子 100 m バタフライ第 1 位、男子 200 m 自由形第 1 位 男子 100 m バタフライ決勝 5 位
○ 2017 年度	陸 上	全国高専体育大会	男子 800 m 第 1 位、男子 1500 m 第 1 位、 男子やり投第 1 位
	弓 道	国民体育大会	女子成年の部出場
	水 泳	日本選手権	男子 50 m バタフライ出場
		ジャパンオープン	男子 50 m バタフライ・100 m バタフライ出場
		インターハイ	男子 200 m バタフライ出場
		国民体育大会	男子 50 m バタフライ・100 m バタフライ出場
		日本学生選手権	男子 100 m バタフライ出場
	テニス	全国高専体育大会	男子団体優勝、女子ダブルス優勝
	陸 上	インターハイ	男子三段跳出場
		国民体育大会	少年男子共通三段跳・成年男子共通 4 × 100m リレー出場
		全国高専体育大会	男子 200 m 第 1 位、女子 100 m ハードル第 1 位
			
○ 2018 年度	水 泳	全国高専体育大会	男子 800m 自由形第 1 位、男子 200m バタフライ第 1 位 男子 100m 背泳ぎ第 1 位
		インターハイ	男子 100m バタフライ・男子 200m バタフライ出場
		全国国公立大学選手権	男子 400m 自由形出場
	テニス	全国高専体育大会	男子団体優勝（2 連覇）
			
○ 2019 年度	弓 道	全国高専弓道大会	男子個人優勝
	水 泳	全国高専体育大会	男子 100 m 背泳ぎ第 1 位、男子 200 m バタフライ第 1 位
		全国国公立大学選手権	男子 100 m 背泳ぎ・男子 200 m バタフライ出場
		日本学生選手権	男子 100 m 背泳ぎ・男子 200 m バタフライ出場
	テニス	全国高専体育大会	女子ダブルス優勝、女子シングルス優勝
	陸 上	全国高専体育大会	女子 800m 第 1 位
		インターハイ	男子三段跳・男子砲丸投出場
			

○ 2020 年度	コロナ禍のため多くの大会が開催自粛		
○ 2021 年度	水 泳	全国高専体育大会	男子 100 m バタフライ 第 1 位
	バドミントン	インターハイ	男子シングルス出場
	陸 上	全日本競歩輪島大会	男全日本 10km 競歩 7 位
		インターハイ	女子 800 m 出場
		全国高専体育大会	女子 800 m 第 1 位、男子砲丸投第 1 位
○ 2022 年度	水 泳	全国高専体育大会	男子 100 m バタフライ 第 1 位
	テニス	全国高専体育大会	地区対抗女子団体戦優勝
	陸 上	全国高専体育大会	女子 800 m 第 1 位
○ 2023 年度	バドミントン	全国高専体育大会	男子シングルス優勝
	陸 上	全国高専体育大会	女子 800 m 第 1 位 (4 連覇)



4. 愛好会の活躍

ここ 10 年間に新しい個人種目での活躍が目立ってきました。それに伴って、サーフィン競技クラブ、ボウリング競技クラブ、スポーツクライミング競技クラブ、空手道、柔術といった愛好会が設立されました。サーフィンではプロが参加する大会に出場するなど優秀な成績を収めています。ボウリングは 2022 年度第 77 回国民体育大会（いちご一会とちぎ国体）、少年男子団体で 4 位という好成績を収め、スポーツクライミングも 2 年連続で国体出場を果たしました。

e スポーツ研究会は 2018 年度第 1 回全国高校 e スポーツ選手権決勝大会出場を果たし、第 3 位となりました。この話をモデルにして映画「PLAY！～勝つとか負けるとかは、どーでもよくて～」が製作されました。この映画では本校の教室が撮影場所の一つになり、本校学生も出演しています。また、2021 年度第 4 回大会、2023 年度第 6 回大会においても予選を勝ち抜き、決勝大会に出場しました。



5. コロナ禍における蒼阿祭（高専祭）

2020年度はコロナ禍のため多くの活動が自粛となり、蒼阿祭も中止となりました。翌年の蒼阿祭は、相変わらずコロナ禍に阻まれ、飲食提供なしなど多くの制約の中での開催となりました。制約が多く本来の蒼阿祭のイメージから遠いため、この年は蒼阿祭の名称を用いず、高専祭としました。そして従来2日間の開催であったものを1日開催とし、軽音楽の演奏は無観客としLIVE配信を行うなどの工夫を凝らしました。飲食提供はできませんでしたが、カラオケ大会、ストリートピアノ大会など、新たなことを取り入れて新しい高専祭の形を創ることができたと思います。2022年度はこの形を継承しましたが、2023年度は名称を蒼阿祭に戻し、キッチンカーを呼び、お笑い芸人を招くなど、更に新たな試みを行いました。コロナ禍によって多くの学生の活動が犠牲となりましたが、その中でもこうした工夫を凝らしながらそれぞれの「アオハル」を追い求めた学生の姿は尊く、特筆すべきことと思います。2020年度から2023年度にかけてコロナ禍においてこうした苦労と活動があったことを記して、60周年の記念とします。



明正寮のあゆみ

寮務主事 田上 隆 徳

明正寮は、過去10年間に於いて様々な変化や出来事がありました。ここでは、その期間内に起こった主な事柄について報告いたします。

1. 女子寮の改修

2018年度に女子寮(5号館)が改修されました。新たな女子寮では、グループ学習がしやすい共用スペースを設けています。日々の学習やミーティングの際に活用することが出来ます。明正寮には現在70名の女子寮生が在寮しており、5号館は女子寮生の生活の拠点となっています。



▲ 女子寮 (5号館)



▲ 女子寮玄関

2. 寮内の設備向上

1) 寮食堂に保温庫を設置

寮食堂をご担当頂いているコンパス・グループジャパン株式会社のご協力により、寮食堂に保温庫が設置されました。これにより常に温かいおかずの提供が可能となりました。食事を楽しみとしている寮生は多く、有意義な食事の時間を過ごしています。



▲ 寮食堂の保温庫

2) 全号館に安全・安心カメラを設置

寮生の安全を守るために、全号館の入り口および要所に安全・安心カメラを設置しています。これは不審者の入館を防ぐためのものであり、全寮生の安全を見守っています。また、5号館には安全・安心カメラだけでなく、入館の際の電子錠、建物周囲に赤外線センサーが完備されており、女子寮生の安全を堅固に守っています。



▲ 電子錠 (5号館)

3. コロナ禍への対応

2020年1月に始まった新型コロナウイルス感染症に対処するため、明正寮では様々な感染防止対策を講じました。マスク着用・手指消毒の徹底、寮室・寮食堂のパーティションの設置、日課における人数制限・時間制限などです。寮生および保護者のご協力により、これまで大きな混乱もなく今日に至っています（現在では様々な制限を緩和しています）。



寮室のパーティションカーテン ▶



▲ 寮食堂のパーティション

4. 寄宿舍2号館の改修

2022年度に寄宿舍2号館が改修されました。2号館は主に1年生男子が生活する棟です。4人部屋を基本として、1年生男子はここで集団生活に必要な様々な事柄を学びます。1階には風呂場とランドリールームがあり、寮生は快適な生活を過ごしています。



▲ 改修された2号館



▲ 寮生居室

5. 明正寮の今後について

学寮の運営において、寮務主事として強く感じることが、現在の役員寮生・各種委員会の学寮に対する貢献の大きさです。役員寮生の役割は、寮生間のトラブル対応にはじまり、身だしなみ指導、学習励行指導など多岐に渡ります。阿南高専生の約半数を占める寮生の生活を円滑にそして安全に運営するためには欠くことのできない存在です。また、明正寮には環境委員やイベント委員など、7つの委員会があり、それぞれがより良い寮生活となるよう努めてくれています。役員寮生・各種委員からは「明正寮をもっと良くしたい」との強い思いが感じられます。これら積極的な寮生の活動は、これまでの歴代の寮生ならびに寮務管

轄教職員の働きかけのお蔭だと感じます。ここに深く感謝致します。今後も寮生と一緒にあって、「明正寮に入って良かった」と思ってもらえるよう努めます。

国際交流室・ グローバル推進室 10年のあゆみ

グローバル推進室長 安田 武司

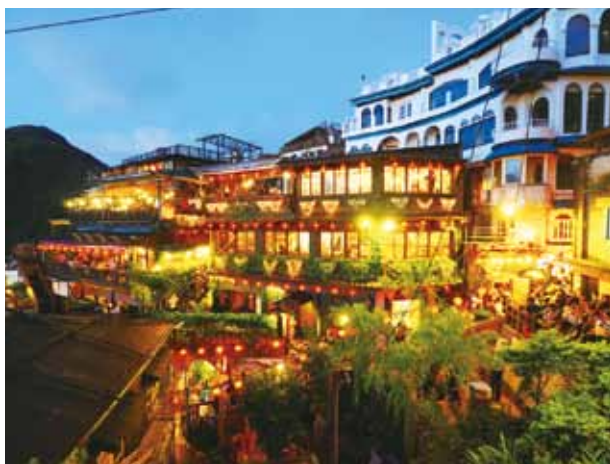
2010年4月に正式に発足した国際交流室は、現在から10年前となる2014年からも活発に本校の国際交流・連携を推進し続けています。室長は、2018年度まで林田栄治先生（一般教養英語・名誉教授）、2020年度まで松本高志先生（電気コース）、2021年度の1年間は小林美緒先生（電気コース）、そして2022年度、2023年度は安田武司（機械コース）が務めています。2021年10月には名称を「国際交流室」から「グローバル推進室」と変更いたしました。林田先生が築き上げた体制を基盤とし、阿南高専キャンパス内のさらなる国際化と、キャンパス内での国際人養成をより高いレベルとすることを踏まえた名称の変更です。

それでは、最近10年での特徴的な活動をご報告いたします。まずは台湾研修旅行です。特に2、3年生を対象として、2015年度より取り組みが開始されました。3泊4日程度の台湾への海外研修旅行であり、本校と協定を結んだ台湾国立聯合大学との学生間交流、工場見学、班別自主研修、国立故宮博物館見学などが主な内容です。参加学生からは、「言語が違っても積極的に話すことが大事」、「次回、海外に出る機会があれば、今回の反省を活かしたい」、「海外に行く自信がついた」など、毎回活き活きとした感想があがっています。続いて2018年度より開始されたのがニュージー

ランド語学研修です。学生が現地の家庭にホームステイしながら、大学等に通い5週間英語を学びます。普段は日本で工学を学ぶ阿南高専生が長期休業の間に本物の英語を体感・体得するため、将来、参加学生がグローバルに活躍することのできる技術者となることを大いに期待できるプログラムと言えます。その他にも、この10年間ではドイツとの関わりも深めました。オスナブリュック応用科学大学、オストフアリアヴォルフエンビッテル応用科学大学と協定を結び、交換留学から互いの文化を理解しつつ、研究・科学技術面における共働も進んでいます。特に2016年度には、本校学生がオストフアリアヴォルフエンビッテル応用科学大学に1年間留学し、ライブツィヒで開催された国際ロボカップに大学国際チームのメンバーとして出場しています。新型コロナウイルス感染症による影響から、以上の活動を一旦停止せざるを得ない状況に陥りましたが、その間、Web会議手法を用いた学生間交流や、協定機関をお招きしたWebセミナー（ウェビナー）など工夫を凝らしながら可能な限り活動を続けました。そして、2022年度から3年間の予定でJICA国別研修「工学・技術教育に関する日本の高専手法の導入への協力」のもと、マレーシア人的資源省の科学技術者教育機関である上級技術



▲ Web 会議によるドイツ学生との交流



▲ 台湾研修旅行（両写真とも）





◀▶ ベトナム カオタン工業短期大学（KOSEN モデルコース）への短期留学

訓練センターの教員 6 名を本校に受け入れて約 2 週間の視察研修を実施します。また 2023 年度は学内に「KOSEN モデルコース」を有するベトナム カオタン工業短期大学への約 1 か月の短期留学を中心に学生を海外派遣するなど、国際交流・連携活動を力強く再開しました。

続いて、本校での留学生受け入れに関する発展を記します。各国からの国費留学生やマレーシア政府派遣留学生のみならず、最近 10 年ではモンゴル政府派遣留学生も積極的に受け入れました。本校の日本人学生は、これらの留学生からの異文化や言語の刺激を受け、国際交流・連携の重要性についての認識を深めています。タイとのつながりも強めつつあります。日本型高専の教育制度を導入したタイ初の高専（KOSEN-KMITL）が 2019 年 5 月に、2 校目の高専（KOSEN-KMUTT）が 2020 年 6 月にそれぞれ開校し、本校はこれを支援する「タイ高専プロジェクト推進校」に選出されております。こういった経緯から、2022 年度に KOSEN-KMITL より 3 年次編入生を受け入れました。また、同国のチュラポーン王女科学

学校の中学課程を修了した学生を高専の新生として迎え入れ、長期留学のかたちで専攻科修了までエンジニアの卵として温め、人材を育てる取り組みにも参加しており、2022 年度に 2 名、2023 年度にさらに 2 名を受け入れています。これらの留学生達と日本人学生達は阿南高専キャンパス内において互いに刺激し合いながら共に成長しており、引き続き阿南高専から国際人が輩出されることが期待できます。



▲ 伊島への遠足



▲ タイからの留学生（両写真とも）



▲▶ 日本語弁論大会



地域連携・テクノセンター 10年のあゆみ

地域連携・テクノセンター長
長谷川 竜 生

地域連携・テクノセンターは、本校の教育研究助成会である ACT フェローシップ（2023 年 7 月より阿南高専科学技術振興会（略称：AST）に改名）と連携して、この 10 年間も本校の地域連携・教育研究の総合推進の拠点として活動してきました。

研究面での取組では、2016 年に徳島県、徳島大学、徳島文理大学及び四国大学と徳島県水産業の成長産業化を図る協定を締結し、水産海洋分野の研究に力を入れて、これまでに科研費など多くの外部資金獲得の成果を挙げています。2017 年には、高専初の寄附講座として 10 年間にわたり多くの研究成果を創出した寄附講座の最終セミナーとして、青色 LED 開発でノーベル物理学賞を受賞した天野浩氏の特別講演を実施しました。また、2021 年に地域連携・テクノセンター内の部門の一つである環境研究部門を防災環境研究部門に名称変更し、新たに産学連携高度レーザー基盤研究部門を立ち上げました。防災環境部門は、南海トラフ地震に備えて、東京大学羽藤英二研究室と連携して事前復興・防災に関する研究や地域住民を対象とした事前復興まちづくりに関する取組を行っています。産学連携高度レーザー基盤研究部門は、光・レーザー技術に特化した研究や情報発信、人材育成の拠点作りを目指した活動を行っています。



▲ 小さな事前復興プラン発表会

教育面での取組として、2020 年より ACT 企業から講師を派遣して頂いて知的財産教育に取り組み始め、現在では本科 1 年から 5 年までの一貫した知財教育を実施しています。低学年からの継続的な知財教育を実施することで知財マインド

の育成を目指しています。2021 年には、ACT 企業等が抱える経営課題・技術課題・地域課題を本校に持ち込み、それらの課題解決を企業と学生・教職員とが連携して行っていく「ACT 倶楽部」を発



▲ ACT 倶楽部学生のポスター発表

足しました。2021 年に 5 課題が活動を始め、2023 年に第 2 回の課題募集を行いさらに多くのテーマで多くの学生が活動を行っています。その活動状況について、学生に定期的に ACT 企業などにポスター発表してもらっています。同じ 2021 年にアントレプレナーシップ教育として、阿南高専卒業後に新しいビジネスにチャレンジしている方を講師として、自分の経験も交えながら起業するときの問題やその対応などについて講演して頂く「ACT 起業塾」を開始し、毎年 2 名の方に講演をお願いしています。

本校学生への教育だけでなく、小中学生への理科教育、社会人向けのリカレント教育にも力を入れており、従来の公開講座だけでなく様々な外部予算により実施しています。2018 年まで 12 年間、LED に関する基礎から応用までを講義・実習する「LED 関連技術者養成講座」を実施してきましたが、2019 年からは徳島県が採択された内閣府事業の一環として、光関連商品・ビジネスの開発支援講座（次世代光関連事業開発支援プロジェクト）を実施しています。2022 年には文部科学省「DX 等成長分野における就職・転職支援のためのリカレント教育推進事業」により「新しい事務職へ就職・建設業 DX リカレント講座」を実施しました。この他に、「とくしま科学技術アカデミー Society5.0 体感事業」による小中学生への理科教育、「とくしまリカレント教育推進事業」による社会人教育を毎年継続して実施しています。



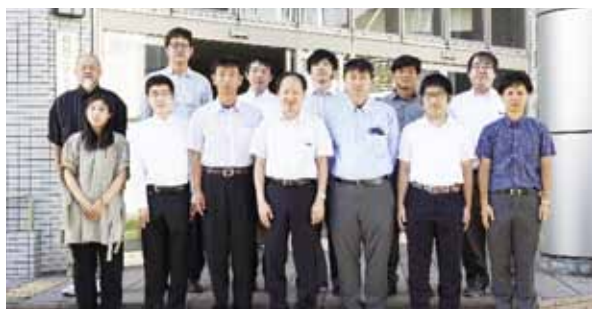
▲ 次世代光関連事業開発支援プロジェクトの講座

技術部 10年のあゆみ

技術部長 吉村 洋

技術部は、技術職員で構成される教育研究支援組織であり、工業高専の使命である実践的技術者の養成に重要な役割を教員とともに、この10年間に継続して担ってきています。現在、技術部長の下に木原義文技術長、遠野竜翁副技術長、立石清副技術長、立石学第1グループリーダー、川端明洋第2グループリーダー、東和之第3グループリーダー、佐々木翼第1グループ員、新田幸平第1グループ員、東條孝志第2グループ員、松下樹里第2グループ員、尾崎貴弥第2グループ員、高瀬厚志第3グループ員、および高岸時夫再雇用職員、森時秀司再雇用職員のメンバーで運営しています。

2019年8月から、実験実習工場の改修が始まり、2020年3月に完成し、創造技術ファクトリーとして稼働をはじめました。コロナ禍のため、キックオフ見学会は12月23日（水）になりましたが、表原立磨阿南市長（当時）をはじめ、48名の参加者で行われております。創造技術ファクトリーは、旋盤・フライス盤・CNC旋盤・NCフライス盤・マシニングセンタ・炭酸ガスレーザー加工機・ワイヤーカット放電加工機、カーボンファイバー3Dプリンターや各種溶接機などの設備が配置された実験実習工場ゾーンに加えて、新たにフューチャーテックセンターゾーンを有したものとっております。フューチャーテックセンターゾーンは、学生が主体的に活動できるロボット創造開発室、社会人技術者が試作や研究ができるファブラボ、および地域企業と阿南高専でオープンイノベーションを目指すことができる協働プロジェクト開発室から構成されています。



▲ 技術職員集合写真



▲ 授業風景



▲ 創造技術ファクトリー（内観）



▲ 創造技術ファクトリー（外観）

学生相談室 10年のあゆみ

学生相談室長 山田 洋平

2023年度の学生相談室は、教職員10名、カウンセラー3名、ソーシャルワーカー（SW）1名で構成されます。校務分掌により教職員は毎年変わりますが、学生相談室に関心を持ち、長く携わっている方も多くいます。カウンセラー3名は10年以上継続して勤務しており、本校のここ10年の変遷をともに見守ってくれています。2018年、新たなメンバーとしてSWが加わりました。SWは福祉の専門家であり、悩んでいる本人だけでなく、家族や行政にも働きかけて問題解決にあたります。SW加入以後は、学外組織との連携も増え、医療機関や行政とも情報を交換しながら、事に当たる場面も多くなりました。教員、カウンセラー、SW、あるいは学外組織など多様な視点からの意見が集まることで、学生相談室としてもバランスの良い意思決定を行うことができると考えています（このような状況をSWが高専機構主催の学生支援研修で発表した際、他校から羨ましいとの声が聞かれたそうです）。円滑な校内連携の背景には、勤務日が異なる中であっても、カウンセラー、SWが日程を調整し、定期的にミーティングを実施していること、そしてもちろん、相談者に関わる全教職員の協力があるからだと考えています。

続いて、学生相談室の場所を紹介したいと思います。2017年度以降、全面改修を受けた図書館棟1階の一室に入っています。改修を受けた部屋はきれいに整っており、窓からはクスノキが見



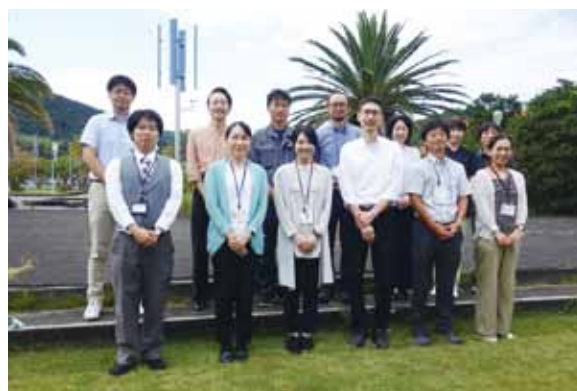
▲ 相談室

えます。カウンセラー曰く、このクスノキが、相談が行き詰まった際の清涼剤になってくれるそうです。また、学校で過ごしづらい学生の支援（居場所づくり）のため、学生相談室と同じフロアにサポートルームと呼ばれる部屋を設置しました。運用を開始して3～4年になりますが、悩みを抱える学生の居場所として、また学習の場として上手く活用できるようになってきました。

悩みの原因が複雑化、多様化しており、学生相談室としても問題対応のためには教職員だけでなく、カウンセラーやSWなど専門知識を有した人との連携が不可欠です。それでも、相談に来てくれた全ての人の問題を改善、解決できるわけではありませんし、分かり易い成果が残せるわけでもありません。それでも、学生相談室は相談者の話を聞き、相談者にできるだけ寄り添う存在でありたいと考えています。



▲ 相談室



▲ 学生相談室教職員集合写真

キャリア支援室 10年のあゆみ

キャリア支援室長 吉田 晋

キャリア支援室は、低学年からのキャリア教育と企業と連携した「コーオペ教育」の実施、全国一の規模を誇る「企業研究セミナー」の開催、求人倍率25倍の就職支援、大学編入学の支援に取り組んでいます。

最近10年の取り組みとして、キャリア教育に関して、2020年度入学生からキャリアデザインに関する新科目が2科目スタートしました。「キャリアデザイン1(必修1単位)」は、LHR(学活)で開講していた「キャリア教育」を単位化し、1年生から3年生までの3年間で今後の進路を見出すためのヒントを学生に与えるもので、新型コロナ対応でビデオコンテンツにて開講しています。その時々自分の思いや感想をポートフォリオに保存して、振り返りができるようにしています。「キャリアデザイン2(選択・最大3単位)」は、これまで単位化できなかった学生のいろいろな活動、キャリア支援室主催のセミナー・講演会などを、ポイント制にして蓄積していくことで単位として認める科目です。スタンプシートに記録して蓄積する仕組みで、学生の自主的な取り組みが育つことを期待しています。

企業からの求人状況としましては、2014年1,800社から2018年2,620社に増加し新型コロナの影響もあり2,500社程度で横ばいでした

が、2023年は2,598社と再び増加傾向にあります。本校で開催している「企業研究セミナー」は、2018年から12月初旬に日程を変更し303社が参加。新型コロナ対応時期は、オンラインで開催し240～345社が参加。2023年は2つの体育館を使って12月初旬に360社が参加して実施します。専攻科1年と本科3年生と4年生が参加し、2年生の希望者も参加します。

高専の良さの一つは進路の幅の広さで、就職も進学もできる面で非常に魅力的です。また、大学編入学では複数の国立大学を受験でき、大学入試に比べると選択肢が広くなるのが魅力の一つです。大学編入学試験に特化した対策講座として「特進セミナー」を開催しています。特進セミナーでは可能な限り各学生の志望大学に焦点を当て、講義、過去問の分析・解説を行っています。また、進学を目指す学生が集まり、グループで過去問を解き合ったり、一緒に大学のオープンキャンパスに行ったりと互いに切磋琢磨できる環境が提供できています。特進セミナーでは編入先の選択肢の幅が広げられるような活動を進めていきます。



▲ 特進セミナーの講義の様子



▲ 企業研究セミナーの様子

広報情報室 10年のあゆみ

広報情報室長 藤井 浩美

広報情報室では、ここ10年、広報活動の多様化や広報戦略の多元化に取り組んできました。SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）の急速な普及やコロナ禍における様々な行動制限は新しい広報活動の形態を模索する契機となりました。主なものを取り上げて報告いたします。

▶ 徳島県外での広報活動

阿南会場、徳島会場、西部会場、淡路会場の4会場で開催していた本校主催の高専説明会および入試説明会ですが、より幅広い地域の中学生をターゲットに広報活動を展開すべく、2022年からは、東京と大阪で開催される国公立私立高専合同説明会（KOSEN FES）にも参加を始めました。さらに、新しい広報戦略としてメタバース環境での高専説明会（KOSEN FAIR）にも出展するなど、様々な機会を積極的に活用し、阿南高専の情報発信の幅を広げてきました。こうした広報活動の結果、夏の中学生1日体験入学への県外中学生からの参加申込み数や県外か



▲ 高専合同説明会（大阪会場）



▲ 高専説明会

らの受験者数はこの10年で徐々に増加しています。

▶ 未来の技術者・阿南高専生への広報活動

未来のエンジニアとしての可能性を秘めた子供たちに、ものづくりにもっと興味・関心を持ってもらうために、2022年から年3回、「ものづくり体験イベント」をイオンモール徳島にて開催しています。イベントではVR（仮想現実）体験、eスポーツ体験、ロボット操縦体験、化学実験など、さまざまな体験コーナーを用意しています。イベントには現役の学生たちも参加し、体験・実験の補助を担当します。このようなイベントを通じて、子供たちに科学技術に興味を持ってもらい、ものづくりの魅力を伝えることで、将来のエンジニアとしての可能性を育て、阿南高専への進学を考えるきっかけとなることを期待しています。さらに、高専を知らない中学生以下の生徒や児童、保護者への広報においても効果的な取り組みとなっています。



▲ ものづくり体験イベント

▶ 学生による広報活動

阿南高専の魅力を学生の視点から発信する広報戦略を強化してきました。阿南高専カレッジガイドのCampus lifeのページは、現役の学生が企画および編集を担当しています。2020年には、新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、毎年夏に行われてきた恒例の中学生1日体験入学を中止せざるを得ない状況になりました。その代替イベントとして、2021年から放課後オープンキャンパスを開始しました。このイベントでは、現役の学生がコンシェルジュの役割を果



▲ 放課後オープンキャンパス

たし、中学生とその保護者に校内施設案内やコース紹介などを行います。学生の広報活動への積極的参加は、中学生たちに学生生活、クラブ活動、寮生活、学校の雰囲気などについて、実体験に基づいたリアルな情報・学生たちの本音を直接届けることができ阿南高専への興味・関心を高める助けとなっています。

▶ 広報戦略の多様化

（阿南高専紹介動画・ウェブサイト・SNS）

2020年、高専説明会や入試説明会などは新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、すべて中止となりました。広報活動は大きな制約を受けましたが、「阿南高専バーチャル体験入学」と銘打ち、阿南高専学校紹介動画を作成しました。動画コンテンツは、各コース・一般教養の紹介、校内施設案内、学寮紹介、クラブ活動紹介など多岐にわたっており、コロナ禍においても阿南高専に関する情報を発信し続けることができました。SNSを活用した広報活動は、地理的な制約を受けず、幅広い対象に情報を伝える手段として効果的です。阿南高専学生会 Instagram には、学生たちが学校生活の様子を写真や動画で投稿しています。また、2023年11月にホームページを一新し、オンラインプレゼンスを強化、情報のアクセシビリティを高めました。



▲ 小学生向け阿南高専紹介リーフレット

図書館 10 年のあゆみ

図書館長 松尾 俊 寛

阿南高専正門から入って正面奥に位置する図書館は、1972年の竣工以来、変わらず全学共通の「知の基盤施設」として本校教育研究において重要な役割を果たしています。

今から10年前2014年ごろの図書館棟は、2階図書閲覧室の隣に国際交流室、学生相談室、また1階には学生課、保健室、そして授業を実施する視聴覚室などが入る総合的な建物として機能していましたが、2014年の創造技術工学科の設置に伴う学科改組による施設整備事業の一環として図書館全面改修が行われました。改修前の時点では、2階に、開架の「図書閲覧室」「雑誌閲覧室」「学習閲覧室」と「図書事務室」があり、また2階と1階に閉架「書庫」がありましたが、改修工事で壁の撤去等が行われ2階の開架スペースは1つの「閲覧室」へと統合されました。「閲覧室」では、新聞・雑誌架や新着・企画展示架を入



▲ 新聞雑誌架



▲ 出入り口

り口付近に設け、その先の北側に図書の書架群、南側に閲覧机をいずれも方向を揃えて配置することで、入り組んだ以前の状況が解消されることになりました。また同じフロアに「学習閲覧室」から転じた「アクティブラーニング室」2室が設計されました（現在はその一つが「ラーニングcommons」に変更）。1階には学生相談室、グローバル推進室（旧国際交流室）、そして新しくなった視聴覚室が入り、さらに交流ラウンジや多目的スペース（eスポーツ研究会もここで活動しています）が新設されました。知の基盤施設として、今後も学生・留学生・教職員・企業や地域の方々の多様な学習・交流の場として発展していくことが期待されています。

学生が主体で参加する図書館の活動として、ブックハンティング（選書ツアー）、ビブリオバトル（書評合戦）が広く認知されるようになりました。数名の学生・教職員がパトラー（書評発表者）として書評をプレゼンし、投票によってチャンプ本（一番読みたくなった本）を決めるビブリオバトルは図書館の恒例行事となり、2022年度には連携協力している阿南市立図書館との合同開催によって一般の参加者との交流の機会ともなりました。また、秋のブックハンティングでは徳島市内の大型書店の協力をいただき、学生自ら図書館蔵書に寄与する図書を選定し学生目線の蔵書づくりを推進しています。

蔵書数・貸出冊数の変遷については、2013年から2022年までの過去10年間の蔵書冊数・貸出冊数についての統計グラフを参照ください。



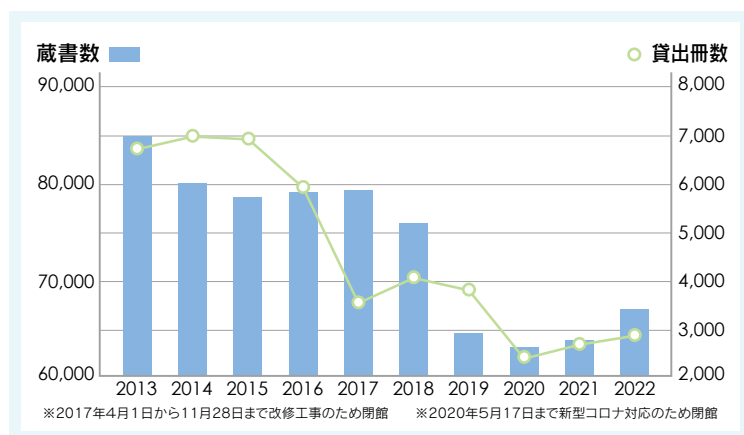
▲ ビブリオバトル



◀ ブックハンティング展示



▲ 企画展（福本袋）



2014 (H26)

化学実験室 3 改修工事

改修前



改修後



2015 (H27)

管理棟屋外避難階段 設置工事

改修前



改修後



建設・化学棟 改修工事

改修前



改修後



2016 (H28)

図書館 改修工事

改修前



改修後



創立 50 周年記念材料工学棟新営工事

新営前



新営後



電気棟改修工事

改修前



改修後



2018 (H30)

寄宿舎 5 号館 改修工事

改修前



改修後



2019 (R01)

実験実習工場 改修工事

改修前



改修後



2021 (R03)

北側出入口橋 新営工事

新営前



新営後



2022 (R04)

寄宿舍 2 号館 改修工事

改修前



改修後



正門前 改修工事

改修前



改修後



2023 (R05)

混住型学生寮A棟（明正寮4号館） 新営その他工事

新営前



新営後



特別寄稿

卒業生より
退職された先生方より



卒業生より

阿南高専から世界へ

2009 年度建設システム工学科卒業
大成建設株式会社

山本 敬三

阿南高専創立 60 周年おめでとうございます。

私は大成建設株式会社に所属しており、現在はフィリピンで鉄道高架橋の新設事業に携わっています。2010 年に阿南高専を卒業後、熊本大学に編入学し、熊本大学大学院前期課程に進学しました。大学院在学中には 1 年間の休学を利用してカナダでのワーキングホリデーも経験しました。2015 年に現在の大成建設に就職し、4 年間は千葉県での高速道路用地下トンネルの新設工事や東京都での地下トンネルの新設工事や地下鉄駅の拡張工事などの施工管理業務に従事しました。その後、愛知県の中高一貫校への出向で、土木業界ではなく教育業界で働く貴重な経験をしました。そして、本社へ異動後に新規工事取得のためのプロジェクト計画立案業務などを経験してから、2023 年 3 月からは国際事業のフィリピンへの赴任となりました。国際事業に関わることは学生時代からの目標であり、やりがいのある仕事に取り組むことができます。

私が日本の会社に所属しながら海外で働きたいと考えるようになったのは、高専 4 年次に参加したソノマ大学の交換留学制度がきっかけです。この制度では、夏休みの 2 か月を利用してアメリカのカリフォルニア州にあるソノマ大学の附属語学学校に通い、英語の授業を受講しました。その学校では世界各国からの留学生が集まっており、異国の文化や



▲ フィリピンにて

習慣に直接触れることができました。この経験を通じて、海外へ行きたいという気持ちとともに、さらに多くのことを学びたいという意欲が湧き、就職ではなく大学への進学を選ぶことになりました。この機会を与えていただき、本当に感謝しています。

高専での 5 年間の思い出は、授業やハンドボール部での活動、寮生活、卒業論文の研究などが鮮明に残っています。私のクラスは多くの教員の方々に迷惑をかけ続けたことを深く反省しています。13 年経過して思い出すと、阿南高専で興味のあることに出会えたことが私にとって大きな財産になっていると感じています。海外への興味やハンドボール、橋梁の研究などがそれに当たります。卒業後も就職後も変わらずに興味を持ち続け、現在の仕事やプライベートを支えており、私の成長への推進力となっています。

阿南高専が創立 80 周年、100 周年を迎えることを願い、私も微力ながら阿南高専の卒業生として世界で活躍する土木技術者を目指して頑張っていきたいと思っています。本当におめでとうございます。

思い出と感謝の気持ちで あふれた高専生活

2014 年度電気電子工学科卒業
徳島大学大学院 創成科学研究科 博士課程 2 年

後藤 祐美

創立 60 周年、誠にありがとうございます。60 年もの間、地域の方々に愛され続ける阿南高専の卒業生であることを誇りに思います。卒業して 10 年近い年月が経ちますが、今も友人と集まっては、当

時を思い返し「学生時代の中で、高専で過ごした日々が一番楽しかったよね」と、思い出話が色褪せることはありません。

改めて高専で過ごした 5 年間を振り返ってみると、部活動、国際交流活動、卒業研究などたくさんの貴重な経験をさせていただき、学科に関係なくたくさんの先生方にお世話になりました。入学当初から興味があり、3 年生で初めて本格的に参加した国際交流活動では、事前に英語の勉強をしていますが、留学生を目の前にすると一言も英語が発せず…でも、どうにかして留学生と交流したいという一心から、夜の 8 時に半泣きの状態で勝藤和子先生に電

話をして、励ましてもらったことがありました。初めて自分の英語で留学生と通じ合えた時に感じた喜びと見えた世界の広さは今でも忘れません。また、5年生で取り組んだ卒業研究では、小西智也先生、釜野勝先生、そして上原信知先生にお世話になり、研究計画の立て方やプレゼンテーションの仕方、論文の書き方まで1つ1つ丁寧にご指導くださり、研究者としての基礎を築いてくださいました。先生方の心強いご支援のおかげで、卒業までに3回の学会に参加し、その中の1回で優秀賞を受賞することができました。—「研究発表に努力賞はない」。研究では、期待した成果が得られることもあれば、いくら試行錯誤を繰り返しても答えが見つけれずに苦労することもあります。上原先生が学会発表後に掛けてくださったこの言葉がいつも私の研究活動の中心にあります。他にも挙げるとキリがないく

らいにたくさんの大切な思い出がありますが、充実した5年間を支えてくださった先生方には感謝の気持ちでいっぱいです。

現在のご縁があり阿南高専の地域連携・テクノロジーセンターでGEAR5.0（Society5.0 未来型技術人材育成事業）の技術補佐員として先生方の業務や学生さんの研究のサポートをさせていただいております。かつては学生として過ごした阿南高専で、10年後に職員として再び過ごせることをうれしく思います。10年前、たくさんの先生方にお世話になり、人生を支えてもらったように、次は私が学生さんを支える立場になればと努めております。守るべきところを守りつつ、時代に合わせて常に進化する阿南高専とともに、これからも成長し、歩んでいきたいと思っています。



私が阿南高専で得た財産

2019年度創造技術工学科（化学コース）卒業
住友化学株式会社

山下 惇

このたびは、阿南高専創立60周年おめでとうございます。思えば、阿南高専では5年間という長い年月を多くの方に支えられて無事に卒業することができました。そこで、私が阿南高専で得た財産を2つご紹介します。

1つ目は、多様な分野への関心が高まったことです。阿南高専には多様な分野・業界で経験を積まれた教員の方々から、人生経験を学べる環境があります。実際に、自身の専攻に加えて他の分野・業界にも関心を持った学生が多く見受けられました。少なからず私自身も影響を受けた一人であります。しかし、ただ単に興味のある分野に手を出すのではなく、1つのモノに着目し、そのモノをいろんな方面から極めていきたいと考えました。そのモノとは「電極」です。具体的に在学中は、炭素電極の物性評価について研究しました。大学進学後は、電極を使った有機合成について研究しました。さらに現在は、プラントスケールで電極を使った電解反応に携わっており、データ解析と合理化を担当しています。このように、1つのモノをいろんな方面から研究した経験は、物事の本質を見抜く力への大きな糧となっています。

阿南高専で得た財産の2つ目は、友人や恩師との繋がりで。在学中は、寮生活や化学コース一期

生として生活しており、同じ志を持つ友人や、幅広い知識・経験を持たれた恩師の方々には度々相談に乗っていただきました。阿南高専を卒業して4年が経過しましたが、嬉しいことに現在でも友人や恩師の方々と交流させていただいております。現在、様々な分野で技術者として活躍している友人との同窓会は、技術や業界に対する視野が大きく広がる貴重な機会になっています。さらに、恩師の方々とは阿南高専に遊びに行った時だけでなく、学会で再会することがあります。同じ分野の研究者としてディスカッションをすることができるため、非常に有意義な時間であると感じています。教員と学生とのコミュニケーションが活発な環境は、阿南高専の最も素晴らしい特徴の一つであると認識しております。在学されている学生さんには是非とも教員の方と積極的にコミュニケーションを取り、将来への糧にさせていただきたく存じます。必ず大きな財産になると確信しています。これからも阿南高専のさらなる発展を心よりお祈り申し上げます。



▲ 化学コース一期生

退職された先生方より



阿南高専での思い出

名誉教授会会長 森 住 昇

創立60周年おめでとうございます。最近の阿南高専のご活躍を耳にするたびに、阿南高専に関わってきた者として嬉しくもあり誇りを感じているところでございます。私は1987年4月に機械工学科助教授として採用していただき、定年までの24年間さらに再雇用で2年間の合計26年間にいろいろありましたが何とか勤め上げさせていただきました。また、名誉教授の栄誉を賜り本当に感謝をいたしております。

まず、赴任してきた当初には機械工学科2クラスを改組し、1クラスを機械工学科として残してもう1クラスを新しい学科とするという案が動いていました。新しい学科の一員として赴任してきた私は、当時の外山實主任の指示の下、文科省提出書類の作成に忙しい思いをいたしました。結果、制御情報工学科の誕生につながっております。

また、校内役職としては、クラス担任はあまり経験せずに、主に学生主事補、教務主事補、寮務主事、教務主事などを歴任させていただきました。その中でも特に記憶に残っているのは、教務関係でのことです。90分授業の導入、坪井泰士先生とともに校訓の簡略化「真理・創造・礼節」の導

入、教室の透明化（廊下側のカーテンの廃止およびスリガラスから透明ガラスへの交換）、教職員の名札の導入、学科再選択制度（2年に進級する際に学科の再選択を行う。現コース選択制度）の導入などを手がけて参りました。

さらに、やんちゃすぎる学生さんに大人しくなってもらうための、学生とのバトルも記憶に大きく残っています。なんとか少し大人しくなっていたきましたが、最近では大人しすぎるとの声も聞こえて参ります。すぎることのない元氣は若い学生さんにとっては必要ではないかと思えます。いろんなことに興味を持ち積極的に行動されることを期待しております。

最後に、再雇用が終了してから早10年がたちますが、いまだに高専に出入りさせていただいております。学生のインターンシップ、就職活動、奨学金、寄付金等、企業と阿南高専との橋渡し役のまねごとを微力ながら務めさせていただいております。これまで人生の多くの期間を阿南高専にお世話になりました。また、これからも関わらせていただくことをお願いし、これからのますますの阿南高専のご発展を願っております。



阿南高専の 英語教育の歩み

名誉教授

勝 藤 和 子

阿南工業高等専門学校創立60周年にあたり心よりお祝い申し上げます。18年間英語教育に携わってきた者として阿南高専の近年の英語教育の歩みについて振り返りたいと思います。

私が着任した2005年度は認証評価の最中で、英語科目は林田栄治先生、藤井浩美先生、私の常勤教員3名と非常勤講師4名が担当していました。当時、高専生の英語力は内外から厳しい評価を受けており、教育目標「専門分野において国際的なコミュニケーションがとれ、表現力豊かに口頭発表ができる技術者を養成する」に対応できるようe-learningを活用したり補講を行うなど改善に取り組んでいました。その前年度からは4年生を対象にTOEIC IP試験が導入され、英語力を客観的に評価する試みも始まっていました。2006年度には、谷中俊裕先生が加わり常勤教員は4名体制となりました。同年の外部評価では、カリキュラムの一貫性や教員間の情報交換が高評価を受け一方で、英語母語話者の必要性が指摘され、2007年度からは母語話者の非常勤講師による「英会話」が開講されました。従来のスピーチコンテストに加え、グループで発表するプレゼンテーションコンテストが新設されたのもこの年でした。

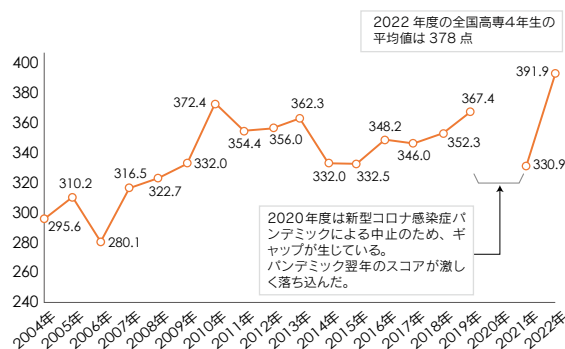
2010年度に国際交流室（現在、グローバル推進室）が発足し、本校独自の海外の大学や企業との教育連携やインターンシップなど国際交流が進化すると、国際コミュニケーション力の強化が一層求められ、2012年度には専攻科の入試にTOEICスコアが導入されました。同年新たに着任された城本春佳先生は、英語の他に第2外国語としてのドイツ語の指導にも携わりました。2013年度には、「国際コミュニケーション力向上事業」が採択され、英語教育改善モデル校として選定されるとGTEC（Global Test of English Communication）が導入され、低学年の英語力を客観的に評価できるようになりました。このような動向を反映して、2010年代前半はカリキュラムの見直しや検討がなされ、教科は「英語1、

2、3」、「英語A、B」、「英会話」、「英作文」、「英語総合1、2」、「英語の語彙文法1、2、3、4」へと改編されました。「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の4技能とコミュニケーション力の指導を充実させるとともに、英文法、外部試験対策も加えた現行のカリキュラムの基礎が整備されたのです。

2014年度には、クラウド型LMS（Learning Management System）の採用により、より豊かな学習環境を提供できるようになりました。2016年度には、モデルコアカリキュラムの導入と高等学校学習指導要領の改訂に伴って、「英語コミュニケーション基礎」が新設され、「英語の語彙文法1、2」が通年科目に改編されて現在に至っています。2019年度には、前年度退職された林田先生の後任にクリストファー・ブライアン・プロワント先生が着任され、母語話者による指導が安定的に提供されるようになりました。2020年度には、転出された城本先生の後任として福井龍太先生を迎え、英語教員は一層体制が整いました。

最後になりましたが、4年生のTOEIC IPスコアについての下グラフを説明いたします。年度毎の学生の皆さんの特徴が異なるので、きれいな右上がりの直線は描きませんが、2004年度には300点に満たなかった平均点は、2022年度には391.9点と400点近くまで上がりました。学生の皆さんの努力の成果であることは言うまでもありませんが、保護者や教職員の方々が英語教育に高い関心を寄せ、ご支援とご協力を下さったことも大きな要因かと思えます。今後少子化や社会の情勢に伴い、カリキュラムの定期的な見直しや担当者の指導力の強化と研鑽が求められることと思います。本校の英語教育のさらなる発展を祈念して、結びの言葉といたします。

TOEIC IP スコア（4年生平均）



高専は好きを進化させる 最高の場所

名誉教授
徳島工業短期大学 学長

多田 博夫

皆さんの「普通」は何でしょう。私の普通は幼少期の機械好きから始まり阿南高専に入学。教員生活を含め、人生の半分以上は阿南高専と過ごし、今も自動車の短期大学で機械好きは続いています。一方では、未来はサイバー空間と融合した Society 5.0 へと進行しています。自動車業界も100年に一度の大変革期を迎え、電動化だけでなく、未来のモビリティ社会への進化が続いており、私も追いかけています。若者の持つ普通は親世代のものとは異なりますが、進路選択では古い価値観に惑わされていると感じます。若者の指導を担う大人や教育機関こそが、新たな価値観を理解し、新しい普通を理解して欲しいと望んでいます。

早期から5か年一貫の専門教育を開始できる高専は、未来を予測した教育へと変化することで、未来を支える有益な若者を育成できます。高専生活は、大学受験などに翻弄されることのない充実した5年間です。これは学生だけでなく、指導する教員も様々な挑戦を可能にします。皆さんは、どんな挑戦をしているのでしょうか？

私は高専ロボットコンテスト（ロボコン）に於いて、阿南高専が全国ワーストに落ちるのを阻止する挑戦を達成しました。全国大会未出場校が残り2校となり、「最後の1校になるのは？」との憶測が広まるなかで、「私が全国に連れて行く！」と手を挙げ、資金や設備、人的支援など最高の体

制を得て、ロボット開発にも新たな手法を取り入れました。奮起する情熱が伝わり、NHK「にんげんドキュメント」による4か月の密着取材が開始。全てをカメラに収録される緊張感が妥協を許さない取組を生み、十分な完成度を持って開発を終えます。四国地区大会初日、阿南高専のロボットの搬入時、モーセの海割りのようにロボットの前に道が開けたのは事実です。十分な準備を積み重ねたとき、その結果は必然となる。地区優勝は逃しましたが、アイデアが評価されて全国への切符を獲得。国技館での全国大会では、ロボコン名物のアイデア倒れ賞という微妙ながらも上位4賞のひとつを獲得。これ以降も阿南高専のロボットは普通のロボットと一線を画し、「独創的なアイデアの阿南高専」と称される様になりました。

高専ロボコン以外にも、多くのアイデア対決に挑戦しました。デザコン等の数多くのコンテストでの結果はメカ好きとして必然の結果を得ましたが、経験もないバレーボール指導で全国優勝の結果を出せたのは、優れた指導者と選手に恵まれたという運も味方しました。男子監督の新井先生にバレーを教わり、高専女子バレーだから可能な非常識も組み入れ、今思えば笑えるような戦術も。5年間選手と接することができた環境は、本当に恵まれました。

私は今、徳島工業短期大学の学長として自動車の全てを味わっています。110年前のT型フォードを復活させ、今とは異なる運転も堪能しました。自動車部員と共にレースを楽しみB級ライセンスも取得。eモータースポーツは3種類6台のシミュレータを導入。映画化されたグランツーリスモはゲームからプロになる実話。学生や地域愛好者と共に練習に励み、国体予選にも参戦。まだまだ私の普通は進化しており、若者と真剣に勝負しています。



▲ 全国高専ロボコン大会初出場を決めた
2003年



▲ 3年連続高専ロボコン全国行きとなった2005年



阿南高専での思い出

名誉教授 當宮辰美

“50周年記念事業”については、私も退職前に話し合っていた記憶があり、あの時から、はや10年が過ぎたのかと時の流れの速さを身を感じています。

「阿南高専が今年で60周年」を迎えられましたこと、心からお喜び申し上げます。

学校から送ってくださる近況報告資料や学校要覧などを拝見して、この10年間にも継続的で着実に成果を上げておられることを、誇りに思っています。

私にとって阿南高専での貴重で重たい思い出は、やはり歴代校長との校務における関わりや繋がりと、その検討内容にあります。初めの一つは、私が教授に昇格した後、当時の西口公之校長から提案された検討項目である、新学科構想のことです。全国の高専が二クラス学科を改組で縮小しようとしている時期に、柔軟な発想を活かす西口校長は、“この時こそ阿南は学科増で飛躍するのだ！”とのことでスタートしました。ちなみに新学科とは、情報技術（ネットテクノ）と経済・経営感覚（マネージメントテクノ）を併せ持つ人材育成の学科構想でしたが、時代の流れに逆らえず取り下げました。また、電気工学科から“電気電子工学科”への改組も行い、私にとっては、「むちゃくちゃな構想提案」でしたが、“とんでもなく面白かった”思い出です。

次の、米山宏校長の時代になると、全国高専にJABEE 黒船という台風並みの嵐が吹き込んで来ました。この時代を経過することで、高専が教育面

や組織面において、大きく変化したと感じています。阿南高専も、グイグイ切り開いていく米山校長指導のもと、先進高専に“追いつき追い越せ！”の意気込みで、学校一丸となって立ち向かい取り組みました。私にとっては後悔の残る時期もあり、“きつかったけれど、面白かった”思い出です。

そして、最後は小松満男校長との、図書館長や専攻科長としての校務繋がりで。物静かで考え深い小松校長と、図書館予算の増加についてよく折衝したことも思い出します。さらに、専攻科において長期インターンシップを導入するための、大幅なカリキュラム変更における話し合いも懐かしい限りです。私にとっては、“しんどかったけれど、面白かった”思い出です。

この原稿を書きながら、同じ空気を吸った多くの先生方やスタッフの方々の顔を思い浮かべると、つらい時もありましたが、良い思い出ばかりが思い起こされます。私にとっての阿南高専は、修士修了直後からの41年間勤務の職場であり、私を良く養い育ててくれたものだと、今更ながら感じ入っています。これからも、教育研究機関として、益々の人材育成発展がありますように！

阿南高専には、1976年から41年間お世話になりました。退職後は非常勤講師として、「パワー・エレクトロニクス」の講義や小松実先生による「電気技術イノベーション実習」の補助教員として、2021年まで担当していました。現在は、趣味の読書、楽器演奏や散歩、自動車旅行を楽しんでいます。



阿南高専と長くて深いお付き合い

名誉教授 湯城 豊 勝

何かのCMに「なが〜い、おつきあい」とかいうフレーズがありましたが、私ほど阿南高専と、長くて深いお付き合いをさせてもらった人間はいないと思っています。思い返せば、1967年4月、5期生（土木工学科1期生）として入学以来のつきあいになるので、57年にもなるのです。入学当時の大きな建物は管理棟・電気棟、一般教科棟・機械棟、実習工場と第一体育館、寮は1号館・4号館（昔の呼び方は北寮・南寮）のみ、小さい建物が点々とあり、土木工学科棟はまだありませんでした。その後建物もかなり増えましたが、月日の経つのは早く、今や建物の老朽化が問題になっているのです。

さて、私にとって大きかった出来事を紹介します。ひとつは土木工学科の改組（1993年）です。昭和から平成に代わる頃より、土木工学科の不人気を取り沙汰されるようになって土木工学科の改組改名に動いたことでした。全国高専の土木工学科教員が集まって、真剣にその将来を危惧して検討を重ねました。1993年に本校土木工学科を改組改名しましたが、他高専の多くは「環境都市工学科」としましたが、「名は体を表わす」の言葉を信じ、本校は「建設システム工学科」として特徴を出しました。

次いで、専攻科の設置（1996年）・日本技術者教育認定機構（JABEE）の認定（2004年）でした。専攻科の授業担当とJABEE認定においては教員の資格が問われるようになりましたが、端的に言えば博士号と論文数です。出来の悪い私には高いハードルになったのですが、多くの先生方のご指導によって何とかクリアできました。

楽しいこともたくさんありました。古くは同級生との学生時代、教員となつては授業や卒業研究、また川やまちづくりの勉強のために外に飛び出してともに活動をしてきたことです。お陰で、人という財産をたくさん得ることができました。また、剣道部顧問としても色んな思い出が詰まっています。何回かは全国大会に引率させていただき、特に女子団体戦での三年連続全国準優勝はとても印象に残っています。

そして阿南高専時代の遺産によって、企業人教育の会社（合同会社ACEネット研究所）が設立でき、今も働けることに喜びを感じています。何の取り柄もない私が長年勤めさせていただき、その後も活動させてもらっていることに只々感謝です。今後も阿南高専が優秀な人材を輩出し、地域の役に立ち、地域にとってなくてはならぬ存在として発展していくことを祈ります。

私の人生訓

名誉教授 西岡 守

阿南高専創立60周年おめでとうございます。

私は、第11期機械の卒業生、65歳です。1994年より30年間、機械工学科と化学コースにて教員をさせていただきました。学生の5年間を含めると35年間に及んで阿南高専とともに成長させてもらった訳です。35年間、楽しいことも苦しいこともありました。とにかく、創立60年間のうち半分以上も阿南高専に携わってきました。阿南高専には感謝しかありません。

50歳を過ぎた頃より、人生訓にしていることがふたつあり、これをご紹介しますと思います。

ひとつ目の人生訓です。

四苦八苦という仏教用語があります。四苦は、生老病死でありよく知られています。続く四苦は次のようなものです。

「愛別離苦」とは、愛する人や物と別れる苦しみです。

「怨憎会苦」とは、会いたくない人や物と会わなければならない苦しみです。

「求不得苦」とは、求めるものが得られない苦しみです。

「五陰盛苦」とは肉体（心身）が思い通りにならない苦しみです。

これらの八苦は、約2600年前に考えられたものです。後の四苦は精神的な苦を表していますが、ひとつひとつ、現在の生活の中にあるものです。人の本質というものは時代を超えて普遍であることを知らしめられます。一方で、苦楽不二という仏教用語もあります。これは、苦と楽は別物ではなく一体のものであるということです。苦はいつまでも続かない、苦の後にはかならず楽があると言えます。時代劇の主題歌の歌詞のようですが、人は苦と楽のなかで成長していくということでしょうか。苦しいと思ったときは「苦楽不二（くらくふに）」を思い出して困難を乗り越えてください。

もう一つの人生訓です。

私たち人にとって不変的な究極の幸せが四つあると東京の有名な住職さんがテレビで話しました。それは、「人から愛されること」、「人から褒められること」、「人から必要とされること」、「人の役に立つこと」だそうです。

このテレビを見てなるほどと思いました。私自身、愛されるとうれしいです、褒められると気分がいいです、必要とされると頑張ろうと元気がでます、人の役に立ち感謝されると快い達成感があります。例えば、見返りを求めない災害ボランティアの方が話します。「被害にあわれた方の、ありがとう、だけでいいんです。」必要とされ、役に立つということが人本来の幸せなんですね。

ここで私は考えました。他者を幸せにすることは普遍的（年齢、国籍、老若男女を問わず）であり、それは、人を愛する、人を褒める、人に頼る、人に感謝するということだと思っています。

みなさん、周りの人と自分を幸せにしてみませんか。



記念式典・記念講演会・植樹式・竣工式・記念祝賀会



◆ 開催日 ◆

令和6年3月20日(水)

◆ 開催場所 ◆

記念式典・記念講演会

阿南工業高等専門学校 創造テクノセンター4階
マルチメディア室

高専制度創設60周年記念事業「高専の森」植樹式

同上 管理棟正面玄関前

竣工式

同上 混住型学生寮(明正寮4号館)

記念祝賀会

ロイヤルガーデンホテル

〒774-0030 徳島県阿南市富岡町あ王谷52-2

01

記念式典

(9:30 ~ 10:00)

- | | |
|---------|---------|
| 1. 開式の辞 | 5. 来賓紹介 |
| 2. 国歌斉唱 | 6. 祝電披露 |
| 3. 校長式辞 | 7. 校歌斉唱 |
| 4. 来賓祝辞 | 8. 閉式の辞 |

02

記念講演会

(10:10 ~ 11:00)



講師 株式会社マイクロミュージアムラボラトリー
代表取締役 近 清 武 氏

演題 「科学を映像メディアで伝える」
～ 科学コミュニケーションを促進する意義 ～

03

高専制度創設60周年記念事業 「高専の森」植樹式

(11:10 ~ 11:30)

1. 開式の辞
2. 来賓祝辞
3. 記念植樹
4. 閉式の辞

04 竣工式 (11:50 ~ 12:10)

1. 開式の辞
2. 来賓祝辞
3. 謝辞
4. テープカット
5. 閉式の辞

05 記念祝賀会 (13:30 ~ 15:00)

- | | |
|---------|---------|
| 1. 開会の辞 | 5. 歓談 |
| 2. 校長挨拶 | 6. 一本締め |
| 3. 来賓祝辞 | 7. 閉会の辞 |
| 4. 乾杯 | |

06 阿南高専 60 周年記念 PR 動画 「^{A I}あいのメガネ」

第1話 「小田先生のメガネ」

第2話 「愛と美月のメガネ」

第3話 「^{A I}あいのメガネ」

<あらすじ>

最高に楽しい学園生活を送りたい女子高専生「美月」は、高専のマッドサイエンティストと陰で呼ばれている「小田先生」が密かに作った「AIで人の心の声を可視化するメガネ」を手にする。これがあれば最高に楽しい学園生活が実現する！と興奮する美月だったが果たして…。

<テーマ>

AIなどテクノロジーが持つ可能性と使い方を誤った時のリスク、そしてコミュニケーションの大切さについて考えるきっかけをユニークに伝える。ロケ場所や心の声の描写で阿南高専らしい世界観を表現。



編集後記

阿南高専創立 60 周年を迎え、この特別な年に記念誌を発刊できることを嬉しく思います。今回の記念誌では、資料集としての要素は控えめに、50 周年からの 10 年間である 2014 年から 2023 年までの出来事を豊富な写真とともに紹介し、さまざまな角度から学校の歩みを追体験できるように心がけました。

この 10 年を振り返ってみますと、国内外で様々な出来事がありました。アメリカでのドナルド・トランプ政権発足（2017 年～2021 年）やイギリスの EU からの離脱（2020 年）は、国際関係や経済、社会に大きな影響を与えました。日本では 2014 年に消費税が 8% から 10% へ引き上げられました。2016 年 4 月 30 日には、新元号「令和」が発表され「新時代」が幕を開けました。しかし何より、この時代を象徴する出来事といえば新型コロナウイルスパンデミック（2020 年）でしょう。「3 密」「クラスター」「ロックダウン」「濃厚接触」「ステイホーム」など、コロナ禍で生まれた数々の新語・造語の登場と共に、公共の場でのマスク着用、社会的距離（ソーシャルディスタンス）の確保、テレワークの普及など、健康、経済、労働など、多くの分野に新しい常識がもたらされました。この影響により、東京 2020 オリンピック・パラリンピックは史上初めて 1 年延期となり、2021 年無観客での開催となりました。

教育現場を取り巻く環境も大きく変わりました。入学式や卒業式、修学旅行、学園祭など、さまざまな学校行事が中止や延期、実施形態の変更を余儀なくされました。教室では、マスク着用での授業や黙食の徹底など、これまでに見たこともないような光景が広がりました。しかし一方で、教育の形態やアプローチが変わり、新しい教育技術の採用が進みました。例えば、遠隔（オンライン）授業が、学びの新しい形態として受け入れられ、定着しつつあります。

編集に携わりながら、過去の記念誌を手に取り、本校の歴史を振り返る機会を得ました。記念誌を通じて人や物の変化を感じ、1 日 1 日の積み重ねが今を作り上げていることを再認識し、歴史の重みを感じました。我々は常に柔軟かつ創造的に変化に対応していくことが求められる存在です。そう考えた時、次の 10 年の変化が楽しみであり、未来への期待が募ります。

最後に、執筆に協力いただいた皆様、そして実務に尽力いただいた関係者（特に総務課 大野紘一郎氏、坂東真由氏）に心より感謝申し上げます。皆様のご協力により、この記念誌が完成しました。改めて厚くお礼申し上げます、編集後記とさせていただきます。

阿南高専創立 60 周年記念事業実行委員会
記念誌編集部会長 藤 井 浩 美

阿南工業高等専門学校 創立 60 周年記念誌

発行 日：2024 年 3 月
編 集：阿南工業高等専門学校 創立 60 周年記念誌編集部会
藤井浩美、藤居岳人、田上隆徳、長谷川竜生
発 行：阿南工業高等専門学校
〒774-0017 徳島県阿南市見能林町青木 265
TEL (0884) 23-7100 (代) FAX (0884) 22-5424
URL : <https://www.anan-nct.ac.jp>
印 刷：有限会社 山田印刷所
〒774-0030 徳島県阿南市富岡町トノ町 34-16
TEL (0884) 22-0118 FAX (0884) 23-3316



